# 未来色ドリーマー　～未来編～

プ羅番氏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
未来色ドリーマー　～未来編～

【Ｎコード】
Ｎ４２２５ＢＶ

【作者名】
プ羅番氏

【あらすじ】
青春時代。高校二年の一年間を共に過ごした知来たち。遠足、文化祭、体育祭や修学旅行。離れ離れになっても、想い出だけは心の中にある。
またいつでも会えるから。
困ったら一緒にいてあげるから。
そう約束しあった仲間たちも、関係は当時と変わり、家族の輪も広がった。
未来の、その先のストーリー。

未来色ドリーマー（高校編）の続編です。ジャンルが違うので分けました。
先にこっちを読んでも大丈夫ですが、少し分からない所もあるかもしれません。
念のため、1話はキャラ紹介にしてあります。

## 人物紹介と導入。（前書き）

高校編読んだ方はすっ飛ばして下さい。

また、これから高校編読んで下さる方は読まないで下さい。少々ネタバレになります。

まあ、ネタバレしても大して変わらないという説もあります。

# 人物紹介と導入。

霜桐知来
本作の主人公。
出版社に就職し、志摩と英語の本を作った事もある。
実家は占い師の血筋で、高校時代は「未来地図」と呼ばれる未来を覗く道具を使った事もあるが、未来はなかなか変えられない事を知った。
バレンタインデーに神奈と舞子に告白され、さらに未来地図を失うが、自分で結論を出して神奈に告白。そのまま結婚に至る。

霜桐神奈（旧姓、清里）
知来の幼なじみで惣菜屋の娘。
ふわふわウェーブでダークブラウンの髪の毛をショートに切り揃えている。オレンジのカチューシャがトレードマーク。
知来と同じ大学に進学し、卒業後に結婚。

志摩桔平
知来の親友で似非関西人。
二年生の終わりに高校を中退し、オーストラリアへ留学。帰国した今は英語の塾講師をしている。

舞子千春
二年四組では学級委員を務め、クラスでも中心的な立場でイベントをこなした。父が地元で有名な舞子グループという会社を経営している。
神奈の親友で、悩みや相談事を共有できる仲だった。

守谷慶一郎

イギリスからの帰国子女で英語とサッカーが得意。全員の事をよく見ていて、盗聴器などの機械の操作もこなす。
地元の大学に進学し、卒業後、治香と結婚。

守屋治香（旧姓、御殿）
御殿家の双子の姉。バスケ部部長で、体育全般で凄まじいポテンシャルを発揮する。
地元の大学に進学し、卒業後、守屋と結婚。

御殿治良
御殿家の双子の弟。剣道部部長で動体視力と反射神経は神の域。
部活引退後、女子剣道部部長だった久留米雛と付き合いだした。
地元の大学に進学。

雨宮陽平
超イケメンで性格も完璧。サッカー部部長だった。
大学は東京の大学に進学。
仲間の助けで、成人式の日に花音に告白した。

雨宮花音（旧姓、雅）
知来の初恋の相手、アメリカから十月に帰ってきた。
金髪のポニーテール。陸上部で、体育祭で活躍。卒業後は体育大学に進学した。
仲間の助けもあり、１２月に知来にフラれた時と同じ場所で雨宮に告白される。

沢野みさと
知来たちの二年次の担任。
英語の担当で、当時は若かった。

青春時代。高校二年の一年間を共に過ごした知来たち。遠足、文化祭、体育祭や修学旅行。離れ離れになっても、想い出だけは心の中にある。

またいつでも会えるから。

困ったら一緒にいてあげるから。

そう約束しあった仲間たちも、関係は当時と変わり、家族の輪も広がった。

未来の、その先のストーリー。

**人物紹介と導入。（後書き）**

【次回予告】帰るべき町

新婚旅行に訪れた知来たち。生まれ育った町と、二人の未来を想う。

# 帰るべき町

北半球が冬である十二月も、南半球では夏にあたる。
飛行機を降り立った知来は周りを見渡した。
知来と神奈は新婚旅行でオーストラリアのケアンズを訪れている。本当はヨーロッパとか北アメリカとかが良かったのだが、仕事の関係で休みが長く取れず、時差の事と神奈の希望も考えてここにした。オーストラリアなら時差ボケが無くて、取った休みをフルに旅行に回せるし。
地元の空港から韓国のハブ空港でアジアの窓口と言っても過言では無くなった仁川空港まで行き、そこからケアンズまで来た。ツアーは舞子トラベルだ。
「やっぱり暑いね」
「夏用の服、久しぶりだな」
神奈は白いワンピースを着て、麦わら帽子を被っている。自分のお嫁さんだからかもしれないけど、とても似合っていると思う。
入国ゲートを問題無くくぐり、舞子トラベルの旗を探す。渡された地図の所へ行くと、舞子トラベルの旗を持った人がいた。
「舞子トラベルはここでーす」
「霜桐です。よろしくお願いします」
少し待っててください、と言われてベンチに並んで座って待つ。すると、スーツを着た日本人の女性が歩いて来た。責任者っぽい。
「霜桐さんですか？」
「は、はいそうですが……」
「お嬢様から話は伺っております。私はケアンズ支部の支部長を務めさせていただいている田中です」
そう言って田中さんは名刺を渡してくる。
「何か、偉い人が出てきたね…」
「よく分からないんですが、これはどういう事なんですか？」

「実はお嬢様から直々に指示を受けておりまして、二人のガイドを務めさせていただく事になりました」
「あいつ……無茶苦茶だな…」
「さすがちーちゃんだね…」
「何か質問などありますでしょうか？」
「あ、そう言えば聞きたい事があったんですけど、なぜ舞子グループの社員はみんな、舞子の事をお嬢様って呼ぶんですか？」
「それは初代社長、つまりお嬢様のお父上が決めた事です。会社のルールなのです」
「舞子父も……無茶苦茶だな…」

一日目は到着が昼だった事もあり、ショッピングモールで買い物をする事にした。また最終日に来るつもりなので、お土産などは見るだけだ。後は、今回泊まる所が普通のホテルでは無く、ご飯を自分で作るタイプのホテルにしたので、食材を買う必要がある。が、これは神奈に任せていいだろう。
「お酒買ってくか」
「おつまみはジャーキーでいいよね？」
そのままホテルにチェックインする。案内された部屋はなかなか広かった。オーストラリアだなー。
少し早かったが、夕飯にする事にして、神奈が調理を始める。
「俺、やる事ないっすか？」
「ないっす。テレビでも見ててね」
テレビをつける。オーストラリアの天気予報をやっていた。
「全部英語だ」
「当たり前でしょ」
「コメディやってる。全部英語だけど」
英語分かるけど……オーストラリアのお笑い？ってよく分からない。何か裸の人が出てきて踊ってるし……きっと外国人から見た日本のお笑いもこんな感じなんだろうが、身体を張ったお笑いって言

っちゃ悪いが低レベルだ。文化祭打ち上げでやった漫才を見せてやりたい。

神奈が作ったご飯を食べる。さすが、食材が変わっても美味いな。

ご飯を食べ終わり、二人で食器を片付ける。特にやる事も無いのでパンフレットを見て、限られた日程の中で参加したいツアーを決める。

「キュランダはどうだ？」

「グレートバリアリーフを意図的に外してるのバレバレだよ……」

「キュランダは良いぞ！この鉄道が綺麗だし、山も自然がいっぱいだ」

「両方行きたいな」

やっぱりそうなるか。

二日目にケアンズ観光、三日目にキュランダ、四日目、五日目に海で、六日目にショッピングに決まった。敗因は神奈の楽しそうな顔につい、うっかりオッケーを出してしまった事だ。ライフジャケットがあれば泳げる……よな？

「起きてても寝ること無いし、寝るか」

「そ、そ、そうだね。わ、私はいつでも準備出来てるから……ね？」

「え？何の準備？ベットはホテルの人がやってくれるだろ？」

一瞬、二人の間にブリザードが通り過ぎた。神奈は両手をぎゅっと握りしめ、顔を真っ赤にして震えている。なんだろう？

「……鈍感っ！！何で昔から私だけ空回りするのかな！」

「わ、わ、ごめん！！分かった、分かったから！」

次の日は午前中ケアンズ観光で、午後は自由時間になった。ケアンズって信号がほとんど無くて、代わりにロータリーになってるから安全に気を使ういい街だと思った。

「午後どうするか？」

「ホテルのプール行きたいな」

「午後どうするか？」

「ホテルのプール行きたいな！」
「……午後……どうしましょうか？」
「ともくん……私の水着…見てくれないんだ……結婚したら冷たくなっちゃった？」
「そ、それは反則だろ！！」
「治香ちゃんがこうすると良いよって教えてくれた」
なんか尻に敷かれてる感があるんだけど……治香の奴め。
渋々水着に着替えてプールへ向かう。泳がなければいいんだ泳がなければ！！

ホテルにはなかなか広いプールがついている。
「泳ごうー」
「いってらー」
ニコニコした神奈に腕を組まれた。この状況じゃなかったら嬉しいのに。階段から恐る恐る入る。
「ほら、足つくよ？腕、離しても大丈夫だよ」
「それは知ってるんだが、腕だけは組んだままで」
「何も出来ないじゃん……」
だからやめとこうって言ったのに。
「ねえ、みんな見てるよ」
「手でも振るか」
まさか知来が泳げないから腕を組んでるとは思わないだろう。白人のお年寄り夫婦は二人をニコニコ見ている。
「俺のせいでプール来てもやる事がなかったな……子供が出来たらスイミングスクールに通わせような」
「そうだね。今日の所は向こうのプールに行こう」
隣の温水プールに歩いて行く。ジャグジー付きのプールだ。
「ともくんは子供、何人ほしい？」
「二人くらいかな。神奈は？」
「私は娘が欲しい。料理を一緒にしたい」

「そうだな。お惣菜屋さんも何とかしないといけないだろうし」
お惣菜屋さんは今も健在だ。なかなか繁盛しているらしい。
「スポーツとかやらないかな」
「どうだか。俺たち帰宅部だったし」
「出来れば優しい人になって欲しいね。人の事も考えられる人に」
それは大丈夫だろう。神奈の子供なんだから。
「名前とかどうしよう。子供が可哀想になるような名前はダメだ」
「前から考えてたんだけど、私たちの名前から一文字ずつ取るとかどう？」
「それいいな」
知来たちは温水プールでお腹が空くまでこれからの事について話をしていた。
いつか、二人も親になって、もしかしたらおじいちゃんになって、家族の輪は広がっていく。結婚して家族になるという事は、相手と全ての責任を共有し、一緒に歳を重ねていくと言うことなんだ。
「死ぬまで一緒だね」
「五歳の頃から一緒にいたけどな」
「あの頃とは違うんだから。夫婦だよ？」
「分かってるさ」
水の中で手を繋いで立ち上がる。
「これからどうなるんだろうな」
未来の事は未来になってみないと分からない。高校生の時に学んだ事の一つだ。
「ねえともくん、二十年後のお互いに手紙とか書いてみない？」
「二十年後か、面白いかもしれないな。日本に帰ったら書こうか」
「ともくんに見つからない所に隠しておかなくちゃ」
「神奈に見つからない所って……どこだろう？」

新婚旅行三日目、ケアンズで観光の主軸となっている二つある世界自然遺産の内の一つ、キュランダの森林観光に来た。今はとある

ツアーに参加している。なかなかに興味深い話ばかりだ。
「ユリシスという青い蝶を見ると幸せになれると言われています」
日本名、オオルリアゲハだと、神奈が教えてくれた。ケアンズにいる間に、どこかで会えるといいな。
「あの木を見てください。あそこの黒くてもっこりした所はコアラの化石です」
「へー、凄いな。どうやったらあんな所に化石が出来るんだろう。地球の神秘を感じるな」
「あ、写真撮ってる人、今のウソですよ。そもそもコアラですらありません」
「写真撮っちゃったし！！地球の神秘とか言っちゃったし！！」
「あんな所に化石なんて出来ないでしょ……」

オーストラリアには様々な固有種が存在する。他の大陸と早い段階で切り離され、生き物が独自の進化をした為だと考えられている。有袋類はその代表だ。
入国検査が厳しいことなどもオーストラリアの動物を守るためなのだ。
オーストラリアは日本の捕鯨に反対しているが、彼らにしてみれば、人間の生活の為に生き物の命をおろそかにするなんてあり得ない事なんだと思う。オーストラリアのように環境に気を使い、自分たちの子孫まで地球を残していきたいものだ。

四、五日目はグレートバリアリーフに行った。ライフジャケットを着ていたので、水に浮いてるくらいは出来たが（無ければ沈むという意味ではない……と、願いたい）、水が透明なので、あの宙に浮いてるような感じは少し恐かった。色とりどりの魚を見る事が出来て、魚好きな俺は満足だ。
少し泳げた気がするが、神奈には波で流されただけだと言われた。俺は認めない。

ツアーの中には潜水艦で珊瑚を海の中から見る奴もあったので、潜れなくてもそれなりに楽しむ事が可能だった。ウミガメも見れたし。

最終日、今日の夕方の飛行機で日本に帰るので、お土産を始め、買い物をする為にショッピングモールへ来た。

「みんなにお土産買わないとね」

「んー、何がいいか分からないな……守やんたちにはフォトフレームもらったよな」

スイスに行った守屋夫妻にもらったのはアルプスっぽいフォトフレームだった。みんなで撮った写真を入れて家のリビングに飾ってある。

「これにしよう、ブーメランの置物。オーストラリアにしかなさそうだし」

「いいね、色は……ちーちゃんは赤で治香ちゃんはピンクかな。後、かのちゃんと雛ちゃんは……」

「雨宮も赤だろ。志摩に黄色で、ハルが緑でいいか。まあ守やんは黒だな。あいつ結構、腹黒いし」

「ねえ、私たちの分も買おうよ。ともくんはこれかな」

「じゃあ俺が神奈のを選ぶぞ」

飛行機が加速する。

滑走路をしばらく走ると、地面がだんだん離れ始めた。

「ケアンズ、あばよ!!」

「何それ。流行らせたいの?」

「気分で言ってみただけだ」

むしろ、昔流行っていた。

窓の外では白い雲が斜め後ろに流れていく。

「また来月、志摩の英語の本が出るんだ。俺が担当だから頑張らないと」

「そうだね。私も治香ちゃんとお惣菜屋さん頑張るよ」
「子供が出来たら家を買おう」
「そうだね。もちろん私たちのあの町に」
「そりゃそうだ。俺だって宮村から離れたくなくて、毎日はるばる隣の県まで通勤してるんだぞ」
東京に出ていた舞子と雨宮と花音だって、オーストラリアに行っていた志摩だって、みんな宮村に帰って来た。ブーメランが円を描いて戻ってくるように、知来たちだってみんな戻ってきた。
「宮村から出る事はなさそうだね」
「俺は宮村に骨を埋めるつもりだぞ」
たくさんの出会い、たくさんの思い出、そして未来、全部宮村からもらった。知来たちには帰るべき場所がある。
「帰ろう、私たちの町に」

## 帰るべき町（後書き）

【次回予告】バーベキュー

あれから何年か経って、昔の仲間とバーベキュー。家族の輪も広がり賑やかさを増す。

# バーベキュー

今年で知来たちも三十歳になる。高校を卒業して十二年、それぞれの子供たちもあまり手がかからなくなったこともあり、久しぶりにみんなでバーベキューでもしようと言う事になった。知来は家族を車に乗せ、遠足の時に行った舞子グループのバーベキューハウスへ向かっている。

知来と神奈は二人の子供に恵まれた。五歳の兄、来夏と三歳の妹、結奈で、名前はそれぞれ二人から一文字づつとっている。

「ママー、まだー？」

「もうちょっとだからね、大人しくしててね、結ちゃん」

「母さん、さっきももうちょっとって言ってたじゃん」

「さっき言ったのは父さんだぞ」

「じゃあ父さん嘘つきだー」

「嘘つきだー」

「嘘じゃないぞ。ほらそろそろ見えるから。カーナビの端っこに」

「それまだまだ五キロ先じゃんー」

それからクネクネ道が続き、車を走らせる事三十分、ようやくバーベキュー場に到着した知来たちは、舞子に指定されていた集合場所に向かった。それぞれとはたまに会ってはいるが、子供たちの多くとは初めて会う子ばかりだ。

守屋家の長男と雨宮家の長男は来夏と同級生、御殿家の一人っ子はその一つ下、守屋家長女が結奈と同級生で、雨宮家次男がその一つ下だ。

「おー、舞子。みんなは？」

「お、やっと来たか。霜桐家が一番乗りだ」

「ほら、二人とも。あいさつしようね？」

「「おばちゃん、こんにちは」」

「お、お、おばちゃん！？」
「ふ、二人とも、ごにょごにょ……」
「「お姉さん、こんにちは？」」
「ぷっ！！」
「おい霜桐夫妻、お前ら教育がなってないんじゃないか？ここで吹き出した霜桐も大概だが」
「いやいや、マナーは躾けてありますよ。ちゃんと言い直したじゃんか、お姉さん。ぷっ！！」
「原因は父親か！！」

そこに守屋、御殿夫妻が到着する。
「おー、二人の子供初めましてだねー」
「ああ、来夏と結奈だ」
「へえ、うちのは英人と詩乃よ」
「こちらは大和です。ほら、挨拶しなさい」
子供たちはすぐに川の方に遊びに行ってしまったが、守屋が見てくれるらしい。そこへ志摩も合流した。
「あれ？まだ揃ってないんか」
「雨宮の所は次男がまだ二歳だしな。すぐ来るだろ」
「先にバーベキューの支度でもしていればいい。男三人で荷物を取って来てくれ」

知来、志摩、治良が荷物を持って来ると雨宮家族も到着していた。花音も二人の子供を連れて川の方に行ってしまったそうで会えなかったが、子供の名前は達平と翔だったはず。
久しぶりに会ったメンバーとそれぞれの事を話し合いながら支度を整える。
「桔平の本、すごい売れてるらしいわね。何だっけ？」
「夢を叶えるための英語参考書や。印税がウハウハやで」
「おかげで俺の出版社もわりとウハウハだ」

「志摩はＴＯＥＩＣ何点くらいなのよ？」
「舞子がいるから言わん」
「私か？私はこの前、３問も間違えたぞ」
「絶対言わん、と言うより言えん……」
３問だけしか間違えてないのか……流石だな。ちなみに守屋は８回連続で満点だそうだ。まあ何問かは間違えても満点になるらしいし。
「あ、霜桐」
「「何？」」
と、知来と神奈が返事をした。
「あー、定番のアレね。陽平、分かってると思うけど、結婚したから神奈も霜桐なのよ」
「それならみんな名前で呼ばないといけないね。雨宮くんは陽平くんか」
「雨宮は治香ですら名前で呼ばなかったからな、逆に治香は旦那以外、名前呼び捨てだけど。あ、おい舞子」
「……私は苗字なのか？」
「結婚してないからな」
「え？じゃあ俺は？」
「「「志摩」」」
「で、ですよねー」

準備が終わり、川に行った子供たちを呼んで来た。バーベキューの始まりだ。
「志摩、肉のタレどうする？」
「ん、じゃあ柚子レモンで。これだけはゆずれんもんな」
「「「笑」」」
「笑う訳でもなく『笑』って言われた！！」
「つまらない」
「しらける」

「親父くさい」
「この五歳児三人組は何や！！かなりの毒舌揃いや！！」
「はい、タルタルソース」
「いらん！！何でタルタルや！！」
「志摩くん、食べ物は粗末にしないでね。子供たちも見てるからね？」
「それを言うなら注いだ知来が悪いやろ！！」
「いちいちうるさい」
「しつこい」
「関西弁に無理がある」
「あー！！五歳児が恐い！！」

しばらくすると食材もほとんど片付き、お腹いっぱいになった子供たちが遊び始めた。
「ふあー、食べた食べた」
「ご馳走様でした。陽平さん、バーベキュー奉行ご苦労様です」
「名前で呼ばれるの慣れないな……」
舞子が電卓で何か計算している。
「今日の割り勘は子供が大人０．５人分で計算するぞ。独身の私と志摩は安いな、ふっ」
「そうだな……数少ないメリット……本人たちも満足っぽいし、楽しませてやるか」
「そうだねー、見てて何だか痛々しいよー」
「聞こえてるぞ！！」
「痛々しいぞ？」
「おばちゃん」
「お姉さんって呼ばれたいらしいよ？」
「この子供たちは何だ……末恐ろしいな」
さっきから独身に厳しいみたいだな……可哀想だから傷をえぐってやるな。

「さーて、そろそろ霜桐家に移動するわよ」
「「「おー！」」」
「ちょっと待て！！聞いてない！！」
「ともくん、こんな事もあろうかと掃除しておいたから大丈夫だよ」
「なぜうちなんだ？」
「習慣やな」
「駄目だ。だいたい雨宮家も広いだろ」
そこに結奈がやって来る。
「ねえ、父さん。私、しのちゃんともっと遊びたいな」
「よし、全員家に来い！！……何でみんなそんな目で見てるの？」
「弱点発見ね」
「まあまあ、お父さんなんて娘にそのうち嫌われちゃうんだし」
「他の男に取られますし」
「何はともあれ、霜桐家行くぞ」
「「「「おー！！」」」」

## バーベキュー（後書き）

【次回予告】現か虚か
知来が見た、ある日の不思議な夢。

## 現か虚か（前書き）

この話、あんまり気に入ってないけど……伏線に必要だから仕方ない……

# 現か虚か

一人目の子供、来夏の出産と同時に俺たちは家を買った。場所はもちろん宮村の町、俺の実家と駅の間、駅まで徒歩約五分の場所だ。

休日、俺は二人目の子供、結奈とリビングのテーブルで向かい合っている。

「父さん、今日は大事な話があるんだけど……」

ちなみにこれは夢である。結奈はまだ１２歳なのだが、これは明らかに２０歳を超えている。恐らく社会人になっている歳だろう。

息を呑むほど美しく育った我が子を誇らしく、愛しく思いながら知来は尋ねた。

「何だ？」

「えっと、会って欲しい人が居るんだけど、時間取れるかな？」

「良いけど」

すると結奈はメールをし始めた。予定を聞かれても分からないんだが、まあ俺の夢だし何とかなるだろう。いつも頼りになる神奈が早く夢に登場してくれないかと思う。

その願いが届いたのか届かなかったのか知らないが、来夏が部屋に入って来た。

「親としてはどうなの？」

「何が？」

「だから結奈が彼氏を連れてくること」

「……ちょっと分からないな。お前は兄としてどうなんだ？」

「俺も分からないから聞いたんだ。結局分からなかったけど」

「会ってみれば分かるだろ。お前は会ったことあるのか？」

「あるさ。あいつは俺の親友だから」

そう言うと来夏は自室に戻って行った。まだ独り立ちしていないのだろうか、それなら心配だ。

そこで俺はこれが夢だった事を思い出す。自分の都合の良いよう

に人が出て来ているのだろう。

しばらく、と言っても俺が長く感じただけで実際は五分も経っていなかったが、玄関のドアが開く音がして、二つの足音が聞こえた。

「お邪魔します」

「お前は……守やんと治香の？」

「はい、両親がお世話になっています」

結奈が連れて来たのは守屋英人だった。身長はそんなに高くはないが、スポーツをやっているだろうその四肢は、しっかり引き締まって頼りになりそうな雰囲気を生み出している。

それからリビングのソファに移動し、しばらく取るに足らないような世間話を続けたが、結奈が注いだ紅茶が空になる頃、英人は真剣な顔で切り出した。

「今日は大切なお願いがあって来ました」

この状況で、大切なお願いとは恐らくアレしかないが。

「お前の両親は俺の大切な友達だ。出来るだけ叶えてやるから何でも言ってみろ」

「結奈さんを僕に下さい」

英人は深々と頭を下げる。

やっぱりこれか。娘を嫁に出す親の気持ちが少し分かった様な気がする。

「ダメだ、と言ったら？」

えっ？と二人は驚いた顔をする。まさかそんな事言われるとは思っていなかったのだろう。

「今はまだ、返事出来ないな」

俺は呆然とする二人を残して書斎に戻った。神奈はまだ夢に登場しない。

書斎の自分愛用のイスに座る。

さっきから夢だと分かっているのに何処か普通の夢でない様な気

がしている。が、その感覚が何処から来るのか分からない。言葉で説明出来ないもやもやが心の中にあった。

ドアがノックされ、返事を待たずに開かれた。来夏だ。

「どうした？親父らしくないんじゃないか？」

「そうか？」

来夏は部屋に立てかけてあるパイプ椅子を出して座った。

「親父が御袋の家に行った時はどうだったの？」

「言う訳ないだろ恥ずかしい」

今でも覚えている。神奈のお母さんがこれ以上ないほど喜んでいた。恐らく毎日お弁当を持って行った娘の健気な努力が実って嬉しかったのだろう。

「ダメとは言われなかったんだろ？」

「じゃなきゃ結婚しても、こんな実家のすぐ近くに住めないぞ」

「じゃあ、英人はどうしてダメなんだ？俺にはそれが納得出来ない。結奈が好きな奴と結婚させてやればいいじゃないか？それであいつは幸せなんだろ？」

来夏は足で地面を叩いた。パイプ椅子がギシっとなった。

「来夏、お前らの名前、どうやって決めたか知ってるか？」

「親から一文字ずつ取ったんだろ？」

「そうそう。来夏の名前は俺が、結奈の名前は神奈が決めたんだ」

神奈と言ったとき、来夏が変な顔をした気がしたが、気の所為だろう。

「結奈の結は、結婚の結。もっと言えば、人との繋がり、糸が吉になるようにっていう神奈の願いなんだ」

「ふーん……来夏の夏は？」

「すまん、それは語呂で決めた。あと夏生まれ」

「まあ嫌いじゃないからいいけど……」

俺はズレてしまった話を元に戻す。

「まあ、俺も別に拒絶した訳じゃない。お前が気にする事じゃないし、余計な事はしなくていいから戻れ」

来夏は少し考えて、何かを掴んだ様な表情をする。相変わらず鋭いやつだな。

「考えがあるんだな？」

そう言いながら部屋を出て行く来夏を知来は答えも返さずに、ただ見送った。

再びドアがノックされ、今度は知来が返事をするのを待ってドアが開いた。英人だった。

「守やんか治香にメールでもしたか？」

「してません」

「来夏は？」

「してません」

英人は部屋の真ん中に来ると、来夏が置いて行ったパイプ椅子の隣に正座した。

「パイプ椅子、座らないのか？」

「結構です」

「それで何のようだ？」

「結奈さんを僕に下さい」

そう言って英人は再び頭を下げた。

「何故また来た？」

「本気だからです。認めてもらうまで諦めるつもりはありません」

「頭を上げろ」

英人はゆっくり頭をあげる。とても整った顔、やはりイケメンだと思う。さすが守屋夫婦の子供。

でも顔が良くても結婚出来るとは限らない。内面を見て、一緒に暮らしていける相手を選ばなくてはいけない。俺は一つ、確信をもって言える事があった。

「俺は子供の性格は遺伝ではなく、育った環境に由来すると思っている。どう違うか分かるか？」

「……親に依存すると言う意味では同じではありませんか？」

「遺伝ならその性格は生まれたとき、母親のお腹の中から持ってきたものだ。だから必ずしも両親の性格に似るとは限らない。二人の悪い所をとってしまったり、祖父母の遺伝子が出たりするからな。だが、家庭環境に関係すると仮定するとどうだ？」

「つまり親を見て育って真似をするという事ですか？」

「真似をすると言うより、親の性格が子供に影響すると言うことだ。親の顔が見たいと言う慣用句があるように、子供の性格は親の性格と関係しているはずだ。もちろん完全ではないし、例外もある、ただの俺の思い込みかもしれないが」

「なるほど、分かりました」

知来はとある二人の顔を思い浮かべる。何事にも真っ直ぐな二人を。

「俺はお前の親をとてもよく知っている。お前たちが生まれて来る何年も前から知っている。お前は二人の事をどう思う？」

「いつも仲がよくて、優しいけど駄目な事はちゃんと叱ってくれて、僕は二人の子供に生まれた事を誇りに思っています」

「守やんは何があっても動じないし、誰に対しても優しく出来る。治香は意志が強くて、一度決めた事は絶対にやり遂げるし、リーダーシップもある。二人とも俺の大事な大事な友達だ」

知来は立ち上がり、英人をさっきよりもさらに見下ろすような感じになる。それでも英人は目線を逸らさない。

「お前はそんな二人の子供だ。俺にとってそれは絶対の信用を意味する。俺の事は今日からお義父さんと呼びなさい」

「……へ？」

「まあなんだ、俺は結奈も信用している。あいつが選んだなら大丈夫だ」

「……へ？あ、あの……何が何だか……」

「だから結奈はやる。いや、貰ってくれ。必ず幸せにしてやってくれよ？」

「えっ？は、はい！ありがとうございます！」

英人はもう一度頭を下げる。さっきまで緊張してたみたいだし仕方ないよな。
「試すような事して悪かったな、初めから断ろうとは思ってなかったぞ」
「え？ああ、なるほど。うちの親が言っていたのはこういう事だったんですね」
「何て言っていた？」
「いや、ただ気をつけなさいって笑って言ってました」
「心外だな」
「あと、ツッコミはプロだとも」
「それも心外だ！！」
ほら、不可抗力でツッコミをしてしまった。守屋のやつめ、ふざけやがって。
「まあいい、結奈の所に行くか」
「はい、お義父さん」

しかし、ドアを出た所で知来の視界はブラックアウトした。気付いたら自分のベッドに寝ている。神奈が起こしに来る五分前くらいだった。
「やっぱり夢だったか」
念のためベッドの周りや枕の下を見てみるが、未来地図はない。高二のバレンタインデーに燃えたはずだ。
「そりゃそうだよな、いるはずの神奈がいなかったし。夢告ならむしろ自分を客観的に見るような感じだからな」
そこで知来はふと思った。
「あれ？そう言えば、未来地図の夢と普通の夢はちょっと違うんだよな……じゃあ今のは？」

## 現か虚か（後書き）

【次回予告】Ｆｏｕｒ　ｍｉｎｄｓ

霜桐家は遊園地を訪れていた。家族の絆は絶対に切れない……はず？

今年で来夏が１４歳（中二）、結奈が１２歳（小六）になり、知来たちももうすぐ４０歳だ（神奈のために具体的な年齢は伏せる）。
知来は今日、家族サービスという事で久しぶりに遊園地に家族を連れて訪れている。
「久しぶりだな、何年ぶりだ？」
「この前来たのは、来夏が小四の頃だから、だいたい四年ぶりくらいかな？」
「俺は去年、友達と来たけど」
チケットは事前に舞子にもらってあったので、開園と共に遊園地に入る。中に入ると見た事のないマスコットが寄って来た。全身オレンジでクリクリの目と小さい逆三角の口、垂れた猫の耳にもふもふの尻尾と癒し要素満天の……何だろう……猫か？
「な、何だこいつ……かわいい」
「こ、これが……ちーちゃんが社長になって考えたって言う……かわいいーー」
「ちょ、ちょっと！父さんも母さんもしっかりして」
「「はっ！！」」

「さて、どこから回ろうか」
「あ、宮っちだ」
「「どこ！？」」
「……ウソだけど」
ちなみにさっきのマスコットは宮っちと言うらしい。ついうっかり余計なお土産を買わないように気を付けなくてはいけない。
「それはそうと、来夏。お前親に向かってウソついたな」
「ウソじゃねえし、からかっただけだし」
「お前、親をからかうなんて……あれか？反抗期か？かわいいー」

「ぐっ、ち、ちげーよ」
「うわー、反抗期の息子かわいいー」
「ともくん、やめてあげなよ。ほら、来夏も反抗期でもいいからね？」
「ぐっ、だからちげーって！」
「な、何だろう……お兄ちゃんがいつの間にか虐められてる気がするよ」
「そうだそうだ、反抗しろ若者よ。俺はお前のオムツを替えた事もあるんだからな」
「もうダメだよ。これ以上は許しませんからね」
「はーい」
「ぷぷぷ、お兄ちゃん、お母さんに庇われてる」
「俺の周りには味方がいない気がする……」

四年間訪れないうちに社長が舞子に変わった事で、遊園地のアトラクションも結構変わっていて、知来たちはとりあえずそれらから乗って行くことにした。
「ジェットコースターが増設されてるぞ、早く乗ろう」
「親父、子供みたいだ」
「反抗期キターー！！」
「からかっちゃダメ、思春期の男の子はナイーブなんだから」
「もう俺嫌だ！！」
「お母さんも結果的にからかってるよね、それ……」
結奈はとても正直で小さい頃の神奈そっくりに育ってくれた。このまま大きくなってくれるとお父さん嬉しいな！！どこぞの誰かのように反抗しないで欲しい。
「お？この前は年齢制限があって乗れなかった結奈も今回は乗れるな。せっかくだしみんなで乗ろう」

そして……

「ま、舞子が考えただけあって凄く怖かったな……鬼お嬢様仕様だった……」
「初めてでこんなのに乗っちゃうと、もうジェットコースター無理かも……」
「次はもっと穏やかな奴に乗らないとさすがにヤバい」
「め、目眩が……目眩が止まらない」
「おいおい、神奈大丈夫か？」
神奈はふらふらしながら近くのベンチに座る。特に回るようなジェットコースターでもなかったが、おそらくあの独特の浮遊感とかそんな所だろう。
「多分少し休めば大丈夫だと思う」
「そうか、それならお前らは二人で回ってこい。お昼前になったら来夏にメールするから」
「えー、結奈と二人かよ」
「お兄ちゃん、あれ乗りに行こう？」
「仕方ねえな、行ってやるか」
「ぷぷっ、素直じゃありませんね、来夏くん？」
「べ、別にそんな訳じゃねえし」
「分かるよー、分かるよ、その気持ち！！お父さんにも思春期はあったんだから」
「うう……は、早く行くぞ結奈！！」
「戦略的撤退？」
「余計なこと言うな！！というか、それどこで覚えたんだ？」

昼になり、霜桐家族は再び集合して、遊園地内唯一のレストランに入った。知来と神奈はあの後、神奈の調子が良くなったのでメリーゴーランドに乗った。まだ恋人だった時に来た事を思い出したなあ。
「さて、食べたいもの頼めよ。久しぶりの外食だからな」
「……って言ってもな……うちが外食に行かないのは、母さんの料

理が美味し過ぎて他の料理が不味く感じるからなんだよな」
「あのコロッケの味は母さんしか作れないよね……」
「いやー、子供に言われると頑張って料理の修行してきた甲斐がかったよね」
「良かったじゃないか、お惣菜屋さんも順調みたいだし」
お惣菜屋さんの方は、神奈の両親、神奈、治香の四人で店を回しているようだ。実際はほとんど神奈と治香が中心で、手が足りない時だけ両親に手伝ってもらっているらしいが。
「写真で見ると美味しそう何だけどな……味はどうなんだろ？」
「確かに神奈の料理は美味しいからな。おかげで俺、飲み会とか不味くて行けないし」
すると急に頭の上から声がした。
「そうか、それなら神奈をヘッドハンティングしないといけないな」
「あ、舞子おば……お姉さん」
「お、おい結奈、お姉さんはねえだろ。ぶははは！！！」
「失礼な奴だな！！！」
げんこつが降ってきた。
「お前、お客様は神様だぞ？」
「他の神様に失礼ですので……」
なにその返し面白い。
「それで舞子お姉様、どうしてこちらにいらっしゃったのですか？」
「つくづくムカつく奴だな！！お前にチケットを渡したのは私だ」
「それダジャレか？」
「違う！！」
「舞子さん、お久しぶりです」
「おう、来夏くんは二年ぶりだな。大きくなったな」
「な、来夏。この人、独身の風格が出ただろ？」
「お前いい加減にしろ！！神奈も黙ってないで何か言え！！」
「うん……あれ？私何て言おうとしたんだっけ？」
「神奈大丈夫か？お前確か、舞子に子育ての楽しさを自慢するんじ

ゃなかったか？」
「もうそのネタでいじるのはやめてくれ！！」
「大丈夫、それじゃないけど……まあ、大事な事ならそのうち思い出すからいいか」
知来たちは舞子のオススメメニューを注文し、昼ごはんを楽しんだ。もちろん料理は美味しかったけれど、やっぱり知来は神奈の手料理の方が好きだなー、と思ってしまうのだった。

夕方、そろそろ遊園地も閉園になるので、一番最後に家族みんなで観覧車に乗る事にした。
「ともくん、よく観覧車が閉園三十分前までしか乗れないって知ってたね」
「だいぶ前にとある事情で知ったんだ……おかげであの時は治香に酷い目に合わされた……」
知来が遊園地での痛い失敗を思い出している間も、観覧車はゆっくりとしたペースで頂上を目指して動いている。
「今日は晴れて良かったな」
「そうだね、二人とも楽しかった？」
「楽しかった！！私、また四人で来たい。お兄ちゃんは？」
「まあ楽しくなかったと言うと嘘になるな」
「素直じゃねーなー、分かるよー、分かるよその気持ち！！素直になるのが恥ずかしいんだよな？」
「う、うるせぇ！！」
四人を乗せた観覧車は頂上を通り過ぎる。太陽は西の空に沈もうとしている所だ。
「夕日が綺麗だね」
「ねえ、お母さん。夕日はどうしてオレンジ色なの？」
「それは俺が説明してやるよ。えっとな……」
知来が神奈と結婚してもうすぐ１６年、来夏が生まれて１５年、結奈が生まれて１３年、知来が隣の県まで通勤している関係で、家

の事はほとんど神奈に任せてしまっている。神奈は気にしないでいいと言ってくれるが、神奈もお惣菜屋の仕事が忙しいはずだし、身体の方も心配だ。何より知来は、結婚式で誓ったように、ちゃんと家族を幸せに出来ているのだろうか、といつも心配になってしまう。

「ともくん」

「何だ？」

考え事をしている最中に急に呼ばれて、知来は右隣に座る神奈に顔を向ける。

「いつも隣にいてくれてありがとう」

夕日に照らされた神奈の笑顔はやっぱり綺麗で、知来は毎度の事だが心を奪われてしまう。

知来はこの際だから聞いておこうと思い、口を開いた。

「なあ、神奈」

「うん？何？」

「俺って神奈に頼り過ぎてない？」

「なーんだ、そんな事を気にしてたの？」

知来の膝の上に置かれた右手に神奈の温かい左手が重ねられる。

「私はともくんからいっぱい力をもらってる。ともくんが頑張ってるから私も頑張れる。私たちは夫婦なんだから、ともくんも全部やろうとしないで二人で足りない分を補いながらやっていけばいいと思うよ」

「なるほど、助け合いか。俺、いつも隣にいるのが神奈で良かった。ありがとう」

今までずっと、隣に神奈がいた。そして出来ればこれからも。

「お兄ちゃん、私、お父さんたちと一緒に乗らない方が良かったと思うんだ」

「奇遇だな、俺もだ」

「わあ二人とも、無視した訳じゃないんだよ？」

「でも私、お父さんとお母さんがいつも仲良しで嬉しいな」

「そうかそうか、二人とも幸せか、お父さん嬉しいぞ！！抱きしめ

てあげよう！！」
「いや、俺は別に何も……うわ！！俺、もう中学生だぞ！！やめろ！！」
「わー、お父さん温かーい」
「はいはい、もう観覧車終わりだから降りる仕度してね」
「素直になれ！！息子よ！」
「離せって！！わあーー！！」
観覧車も夕日もどんどん下がって行く中で知来は確信していた。
この家族の絆は、例え離れ離れになっても決して切れないという事を。

# Four minds（後書き）

【次回予告】もう埋まらない席
色を失った世界。遠い過去の記憶。未来色ドリーマー最終章！

# もう埋まらない席

知来は三つの弁当箱に冷凍食品のおかずを詰める。
「はぁ……もうこんな時間か」
時計の針は六時半を指している。昨日の夜にアイロンをかけておいたシャツを着てスーツの袖に手を通した。
「いってきまーす」
いってらっしゃい、と返してくれる人はいない。

来夏は父親の声で目を覚ました。二階にある自分の部屋から出ると、隣の部屋で寝ていた結奈も出てきたので、そのまま二人で階段を降りる。リビングには二つの弁当箱が置かれていた。
トースターで食パンを二枚焼く間にウインナーとお惣菜屋さんのサラダを皿に盛り付ける。パンが焼けたらバターを塗って皿に乗せる。この決まった手順を二人でこなし、約１０分で食卓には二人分の朝ごはんが並んだ。
「「いただきます」」
二人で手を合わせて、食材に感謝する。食べ物を大切にする母のおかげで身体に染み付いた動作だ。
「結奈、学校は？」
「行かない」
今日から来夏は高校二年生、結奈は中学三年生、結奈にとっては受験もあることだし、大切な年になるはずだ。だが、来夏は学校を休む事を止める事は出来なかった。そして、結奈が休んで何をするのかも知っている。
かつて明るかった食卓が暗く感じるのは、おそらく点けていないＬＥＤの蛍光灯のせいだけではない。来夏も結奈も黙々とご飯を口に運び、食べ終えた皿を流しに運ぶと、来夏は仕度をしに自分の部屋に、結奈はテレビを見るためにリビングに向かった。

最寄り駅で新幹線に乗った知来はイスに座り、特にする事もなく目を閉じた。
すると、久しぶりに違う道を使って駅まで来たせいか、小学生の頃の思い出が蘇ってきた。

小学五年生が終了し、知来たちは春休みを迎えた。みんな次の学年への準備だとか、学校の宿題だとか、やるべき事は結構たくさんあるけれど、知来だけにはもう一つやる事があった。
「花音ちゃん!!」
「あっ、ともくん!!何かなっ?」
それは遠くに行ってしまう人に自分の想いを伝える事。帰りの通学路で、勇気を振り絞ってもう見れないかもしれない背中を呼び止めた。
「花音ちゃん、好きです」
「ありがとう。でもね、私、アメリカに引っ越さないといけないから。バイバイ!!」
小学五年生の頃の霜桐知来の初恋はこの時に終わった。
そのまま知来は家の近くの公園のベンチでうつむいて座っていた。
どのくらいそうしていたのか覚えてないが、地面に映る影が長くなってくる頃、公園に神奈が来た。
「駄目……だったの?」
「うん」
「泣いてる?」
「泣いてない」
神奈は知来の隣に黙って座った。
「ともくん、あのさ」
「何?」
「私でよかったら……いつでも隣にいるからね?」
まだ幼かった知来には、神奈の言ったその言葉の意味がまだ分か

らなかった。それでも隣に誰かがいる事はとても温かくて、安心できた。実際、神奈はいつも一緒にいてくれた。

そして、知来がこの時に二度目の恋が始まったのだと気付いたのは何年も後の事だった。

隣に誰かがいない事がこんなに寒くて、寂しくて、心細い事だったなんて初めて知った。

神奈がこの世を去った二年前のあの日に。

## もう埋まらない席（後書き）

【次回予告】動き出すストーリー
進んでも進んでも前が見えない。明けない夜だってある。

# 動き出すストーリー

「いってきます」
「いってらっしゃーい」
来夏は結奈に留守番を任せると、学校へ向かって歩き始めた。来夏は二年前、両親の母校でもある私立宮村高校に入学し、毎日徒歩で学校に通っている。
宮高は昔は公立高校だったが、十年程前に県の方針で公立高校の合併が盛んになった時期、宮高もその対象になった。しかし、宮高卒業生はそれに反対し、結果的に宮高卒業生、両親の友人で、舞子グループ現社長の舞子千春氏が買収するという形で宮高は守られた。そう言った事で宮高は私立になり、学費も高くなったが、設備投資や経営戦略によって県でも1、2を争う進学校として有名になるまで成長している。
学校に到着して、来夏は去年のクラスに行く。ここで今年のクラスが発表されるからだ。
この学校が進学校になるための経営戦略の内の一つは？特進クラス？の設置だ。7、8組がそのクラスに当たり、その中でも上位半分が8組に入れるという制度になっている。もちろん行事などは？普通クラス？と呼ばれる来夏たちと何ら変わりないが、授業が多かったり、理系文系両方に対処するために数学？、社会理科2科目が必修になるため、俺は普通クラスを選んでいる。もちろん特進クラスはメリットとして、ＡＬＴ常時在中とか、留学とかあるけど。あと偏差値も大体5点くらい特進の方が高い。
前年度の担任教師からクラス発表があり、来夏は新クラス、２－４へ向かう。理事長も兼任している舞子氏がＯＫを絶対に出さないために建て替えが行われない校舎の廊下を歩く途中、幼馴染の二人に出会った。運動の天才児、守屋英人と金髪碧眼の笑顔の王子、雨宮達平だ。

「二人とも何組？」
「二人とも四組だよー。来夏は？」
「俺も四組だ。よろしく」
「よろしくなー」
「こっちこそよろしくっ！」
二人とは昔、両親が友達とやっていたバーベキューで知り合った。
ついでにみんなサッカー部の仲間でもある。
「トイレ寄って行こうぜっ！」
「断る。早く行くぞ」
「えー、守屋は？」
「僕もいいかなー」
「何て薄情な奴らなんだっ！いいか、お前たち、さっき水を飲んだだろう？本当にトイレに行きたくはないか？」
「……そう言われると行きたいような気がするよー」
「待て、守屋！！これは達平の罠だぞ！！」
「行きたくなったものは仕方ないじゃん」
「おい、来夏。膀胱を強く押したりするとトイレに行きたくなるぞっ！」
「それは漏れそうになるからだ……バカ守屋！！やめろ！！」
「ふふふ。どうかなー？」
「……みんな、トイレ寄って行こうぜ」
「「ラジャー」」

「完全に遅刻だ」
「大丈夫、みんなで行けば怖くないさっ！」
「そういう問題じゃねえよ」
四組が中央に位置するのに対し、トイレは端っこだ。そりゃのんびり歩いていたら遅刻するに決まっている。
「おいおい、もう始まってるじゃないか。どうすんだ？」
「どうもこうも、ガラガラ！！」

「遅れてすみませーん」
「お前ら躊躇ねえな！！」
「あなたたち、初日から遅刻ですか！」
担任は？宮高の母？の通り名をもつ沢野みさと先生だった。やっぱり怒ってる……よし、ここは！！
「いやー、綺麗な先生が担任で良かったなぁ～」
「はい、君は席に着きなさい。残りの二人、お説教です！！」
「いやー、こんな綺麗な先生にお説教なんて、むしろご褒美だねっ！」
「君も席に着きなさい」
「ちょっと、来夏、達平。助けてよー」
「自分で何とかしろ」
「そ、そんな。僕は正直だから、こんなおばさんに綺麗だなんて言えないよー」
「表に出なさい！！」
あーあ、バカだ。

クラスメイト一人づつの自己紹介には何とか間に合っていたようで、初日から「あの子の名前何だろう？」状態にはならずにすんだ。まあ、目立たなかったりするとすぐにそうなってしまうんだけども。
出席番号順に自己紹介が進んでいく。来夏たちは二年生なので、去年同じクラスだった奴もいるにはいるが、確率で言うとだいたい六分の五は初クラスメイトだ。
沢野先生はどうやら達平の両親の事を知っているようで、「ああ、あなたが雨宮くんと雅さんの？二人は元気かしら」と言っていた。それなら来夏の両親の事も知っているかもしれない。雨宮父と来夏の父は三年間同じクラスだったという話だし。
前の柴田くんの自己紹介が終わり、来夏が席を立つ。
「霜桐来夏、去年は六組です。皆さんよろしくお願いします」
「ああ、霜桐くんの所の子ね？」

「はい、やっぱり父の事、ご存知でしたか？」
「知っているも何もあの時のクラスは凄かったから……来夏くん、その髪の毛って……」
「この髪の毛ですか？」
ふわふわウェーブ、ダークブラウンの髪の毛。恐らく先生も気付いたはずだ。この髪の毛は誰の遺伝子を受け継いでいるのか。
「どことなく神奈ちゃんの面影がありますね……目の辺りとか」
先生の目に涙が浮かぶ。先生も母の事は知っているのだろう。
「先生、大丈夫ですか？」
「すみません、大丈夫です」
先生はハンカチで目を拭って、クラスを見回す。
「皆さん、まだ自己紹介の途中ですが文化祭の出し物について私からお願いがあります」
宮村高校の文化祭は私学になる前から伝統的に、儲けをクラス単位で競っている。そのため出し物で何をやるかは、毎年どのクラスも話し合いを行い、リーダーを中心に、つまり生徒たちによって決められる。でも……
「お惣菜屋さんをやりましょう」
先生の提案に反対する人はいなかった。と言うか出来なかった。

結奈は九時に家を出た。学校は九時から始まるので、これでは遅刻だが、行き先は学校ではない。
結奈は中学一年の秋くらいから学校に行かないで、家で来夏に勉強を教えてもらって何とかしている。テストとかは小学校の時と中学前期の少ししか受けた事はないが、落ちこぼれる事はないんじゃないかと思っていた。お兄さん教え方上手いし。
学校を無断欠席（昔は家に電話が掛かって来たり、先生が家に来たりもしたけど、もうなくなった。）してどこに行くのかと言うと、亡くなった神奈の実家、お祖父さんとお祖母さんのお惣菜屋さんだ。これは来夏にしか言っていない。父に内緒にしているのは止められ

たくないからだ。
　結奈の家は祖父の家から近くにあるので、徒歩で行ける距離だ。自転車だと、帰りにお惣菜がもらって帰れないので天気が良くても悪くても徒歩にしている。運動もしないと太ってしまうのでちょうど良い。
「こんにちは」
「こんにちは、今日もよろしくね」
　お店では治香さんが出迎えてくれた。両親の友達で、よく母親代わりに私の相談に乗ってくれる、とても優しい人だ。神奈がいなくなってもお惣菜屋さんを手伝ってくれている。それに、今の結奈の事を凄く心配してくれている。
「まだ学校には行けない？」
「……うん……まだ」
「結奈、あんたは何も悪くないのよ？それは分かってるでしょ？」
「それは分かってる」
「じゃあどうして？来夏は学校に行ってるじゃない」
「それはそうだけど……」
　あの事は確かに誰も悪くない。あれは神様が決めた事なんだから。父はそう言っていたし、何より母親である神奈は結奈がこうして学校を休む事なんて望んでないと思う。
「それでも……私はしばらく学校を休むしかない」
「どうして？」
「このままじゃ……お父さんがつぶれちゃう」
「知来が？」
　一番ショックだったはずの父。強そうに見えるけど実は無理をしているのは来夏も結奈も知っていた。
「お父さんはあの日から全てを一人で背負ってる。でもそれは自分を追い詰めてるようにしか見えない。お父さんはあの日以来、何があっても思いっきり笑わないし、どんなに辛くても泣かなくなった」
　一番寂しいのはお父さんなのに。

毎週見ていた動物番組も見ない。ドラマも見ない。映画も見ない。お酒も飲まない。旅行にも行かない。多分それは、神奈の事を思い出すのが辛いから。子供の前で泣いてしまうから。知来は結奈たちのために強いお父さんを演じていた。

「それで結奈は料理を練習する事にしたの？」

「そう。だから教えて下さい」

自分が家の料理を作るためじゃない。父に思いっきり笑ってもらうため。

「治香さん、教えて下さい。コロッケの作り方」

来夏が家に帰ると、リビングで結奈が一人で勉強していた。

「ただいま」

「お兄さん、おかえり。夕飯食べる？」

夕飯は家で炊いたご飯と、お惣菜屋さんのお惣菜だ。炊飯器のスイッチはもう入っていて、画面には残り時間が七分と映し出されている。

ご飯が炊き上がるまでの時間を利用してお惣菜をテーブルに並べる。炊き上がったご飯をよそったら完成だ。

「「いただきます」」

二人とも無言で箸を動かす。箸とお皿がぶつかって立てる音だけがリビングに響く。

結奈がまだ半分以上残っている食器を置いた。この家でご飯を残すのはありえない。それは母親の決めた我が家の決まりだからだ。

顔を上げて結奈を見ると、白い頬には涙の後が出来ていた。

「結奈……」

「お兄さん……」

来夏も食器を置く。

「お兄さん……何だか寒いよ。もう春なのに」

来夏の目にも涙が浮かぶのが分かる。

「このトンネル……いつか抜けれるのかな……」

結奈は堪えきれずに手で顔を覆って泣き出してしまった。
本当に開けない夜はないのだろうか。
来夏たちはまだ、暗闇にいる。

知来が家のドアを開けた時、子供たちはリビングで勉強をしていた。結奈はあれ以来学校に行ってないようだし、これでは神奈に合わせる顔がない。
神奈が倒れた病気は、脳の血管に異常が発生し起こる病気で、誰にでも起こる可能性のある病気らしい。なり易いなり難いはあるにしろ。
家族で遊園地に行った日の三日後、神奈は家で気を失い倒れた。すぐに救急車で病院へ行けば良かったのだが、その日はたまたま結奈も友達の家、来夏も部活の居残り練習、知来もレポートの作成が長引いて残業のため、発見が遅れてしまった。
結奈がちゃんと五時に帰っていれば、来夏が居残りしなければ、知来がレポートを次の日に回して帰っていれば、誰かがいつも通り帰っていれば神奈は恐らく助かっていた。
いや、それ以前に、神奈は遊園地で幾つか病気の前兆が現れていた。知来がそれをもっと気にかけていればよかったんだ。
子供たちは二人とも、神奈の死を自分の所為にしていた。十字架を一人で背負おうとしていた。だから知来は言った。『神奈は何を望んでいるか？』と。
来夏にはサッカーを続けさせた。サッカーが好きならやれ。それは神奈の願いだ。
それでも結奈は時々台所に立つ。どんどん上手になっているのは何故だろうか。才能なのか。
二人には上を向いて進んで欲しい。
十字架は自分が背負えば十分だ。

## 動き出すストーリー（後書き）

【次回予告】Ｓｔｏｐ　ｏｒ　Ｒｕｎ

走る人、止まる人。どちらから見ても、相手は動いてる。

# Stop or Run

知来は弁当を二つ作って一息ついた。今日は志摩と次の本についての相談をする事になっていて会社には行かないので、まだまだ時間がある。

久しぶりに朝ご飯を三人で食べる。それでもテーブルの上には食器と食器が当たる音しかしない。

朝ご飯を食べ終わると来夏は学校へ出かけて行った。結奈は部屋に戻って行ったが、いつも学校を休んで何をしているのかは知らない。家が綺麗に保たれているのは結奈がやっているのかもしれないとは気付いてはいるが。

知来は書斎の掃除をする事にした。ここの部屋には滅多な事がなければ子供が入る事はないので、知来が掃除しなければすぐに汚れてしまうのだ。

お揃いの写真立てを雑巾で丁寧に拭いていく。これは守屋夫妻がスイスへの新婚旅行で買って来てくれた物で、同じ物が舞子や志摩たちの家にも人数分あるはずだ。中には霜桐家四人で遊園地に行った時に撮った写真と三年前、最後にみんなでバーベキューをした時に撮った写真がそれぞれ入っている。

もう届く事のない思い出に心が痛くなる。知来は写真を真っ直ぐ前に向けて置くと、次は棚の整理を始めた。

棚にはオーストラリアで買ってきたブーメランが二つ並んでいる。青とオレンジのブーメランはそれぞれ知来と神奈の物だ。はたきで丁寧に埃を落としていく。

それからしばらくして棚の掃除もだいたい終わった。後は床に掃除機をかけるだけだ。

クローゼットから掃除機を持ってくる。掃除機も昔よりもかなり小さく、軽くなった。結奈でも片手で軽々二階へ持っていけるほどである。

掃除機をかけてフィルターを変えると掃除は終了だ。知来は残った時間で本でも読もうかとシステムデスクとセットの椅子に座った。

割りと厚い本を取ると、棚の奥にいれてある箱が顔を出した。

「これは……」

知来は中を見なくても何が入っているのか分かっている。しばらく開けていなかったが、時間もあるし中を覗いてみようという気になった。

中には神奈の遺品の中でも一緒に燃やさなかった物が入っている。ほとんど燃やしてしまったから残っているのは少ないが、それでも思い出の品である事には変わりない。

その中に一通の手紙が入っている。これだけは神奈ではなく知来が書いたものだ。新婚旅行から帰って来て、二十年後のお互いに当てて書いた手紙だ。残念ながら、その手紙は封を開けられる事はなかったが、知来は捨てずにとっておいた。正確には捨てられなかっただけなのかもしれない。

箱を元に戻す。まだ志摩との待ち合わせには少し早いが、待ち合わせしている駅前の喫茶店に行く事にした。

結奈は知来が家を出て行く音を聞いて、隠れていた風呂場から出て来た。さっきまで薄く開いた書斎のドアから中を見ていた事はバレなかったようだ。

「あの箱……それにあの手紙……何だろう?」

カランコロン、とドアが音を立てる。

「いらっしゃいませー」

ここの喫茶店は舞子グループの系列で、知来と志摩が罰としてアルバイトをした所でもある。いつも志摩との打ち合わせに使うのでマスターも分かっている。

「志摩さん、来てますよ。あの窓側にいます」

「ありがとうございます」

志摩は端っこの席でパソコンの画面を睨んでいた。知来はその向かいに腰を降ろした。
「おう知来、早かったな」
「志摩の方が早かったじゃないか」
「この前にも予定が入ってたんや」
志摩はいまや受験業界のみならず英語業界でも屈指の人気講師になっている。『志摩桔平の英語取扱説明書シリーズの中一～高三編』は受験業界ではいまや必須とされ、逆にそれに載っている物はみんな分かるという事で試験に出ない程である（その都度志摩も傾向を見て書き直しているが）。さらに去年発売された全年齢対象版『英語学習者の味方』は学習本としてかつてない程の売り上げを挙げ、発売当初はどこの本屋でも品薄となった。その上、帯に書かれた『全てが敵に回っても、この本は君の味方』（知来作）が流行語大賞にノミネートされるなど、一種の社会現象とまでなっている。
知来たちは二時間程かけて次に出版する本についての打ち合わせをしていく。後はここで決まった事に沿って志摩が文章を書くだけだ。まだ題名は決まっていないが、とあるアルファベット五文字の英語のテストの対策本だ。
「こんなに人気が出ると注目されるから頼むぞ。まあ大丈夫だと思ってるけどな」
「大丈夫やって。知来はまた流行語大賞にノミネートされるようなキャッチコピー頼むで」
「それはちょっと無理だな……それにキャッチコピーは題名が決まってから考えないと」
「しまーん」
「それはただ流行らせたいだけか？」
「志摩でしょ！」
「アウト！！それパクリだからアウト！！」
「それはそうやな……ところで知来」
と急に志摩は真面目な顔になる。知来としては打ち合わせもこの

位気合を込めて望んでくれれば、半分とは言わないが時間を短縮出来たのに、と思う。
「何だよ？急に改まって」
「今年の夏にバーベキューやらんかって舞子から連絡あったんやけど、どうや？」
毎年恒例の行事として行われていたバーベキューは三年間行われていない。それは単に子供が大きくなって時間が無くなったからだけではない。
「やっぱまだ無理か？結奈ちゃんとか？」
「わからない。なるべく参加しようとは思うけど……」
「そうかそうか、みんな待っとったからな」
お葬式以来、知来は同級生とはほとんど連絡をとっていない。仕事で志摩と関係が無ければ、恐らく誰とも会わない事になっていたはずだ。
「この前、同窓会行ったんや。みんな変わってなかったで」
「変わってないか……そう言えば志摩、お前どうして室内で帽子被ってるんだ？」
「ななな何や？何かおかしいんか！？べべべ別に何も隠しとらんで！！」
慌てた志摩を見て、知来は全てを悟る。
「ああ、お前ハゲたのか」
「ストレートに言い過ぎや！！」
「まだ結婚もしてないのに……可哀想に」
「止めろ！！憐れむな！！」
「結婚する前にハゲるなんて孤独死確定だな……俺んちの出版社に孤独死の対策について書かれたいい本があったぞ」
「その前に髪の毛を蘇らせる選択肢は無いんかい！！それにハゲたからって結婚出来んとは限らん」
「髪の毛あっても彼女すら出来なかったのに？」
「……い、今の時代、髪の毛なんてどうとでもなるやん」

「そう言えばそうだな。と言うかその前にフサカンの育毛剤のおかげでてっきり若ハゲなんて絶滅したと思ってたんだけどな」

約八年前、フサフサカンパニー（通称フサカン）が生み出した？ある内から始める育毛剤？と言う、育毛剤と言うよりは髪の毛の量を減らさないようにする為の頭につける薬のおかげで、今ではサラリーマンたちが髪の毛に悩まされる事はなくなった。知来もフサフサである。

「お前、絶滅危惧種だぞ」

「若い頃から髪の毛染めたりワックスでツンツンにしてたから、もう手遅れやったんや……」

「それならiPSで髪の毛くらい作れるんじゃないか？」

「オーバーテクノロジーやろ。それに高すぎるわ」

徐々に実用化されてきたiPS細胞技術だが、例えば志摩のような使い方だと、保険が使えなくて十割負担になってしまうので、かなりお金がかかるのだ。そんなくだらない事に使うな、と言う事なのだろうか。

「もうズラしかないな。そう言えば俺んちの出版社にズラの事を書いたいい本があったぞ」

「また売り込んで来るんか！！もうこの話は終わりや！！」

二人はコーヒー二杯分をそれぞれ支払い外に出た。

「志摩、今日暇か？」

「おう」

「とりあえずどこかで昼ごはん食べるか」

「ああ、そう言えば安くて美味しいイタリアンの店を見つけたんや。そこ行かん？」

「イタリアンか、じゃあそこ行くか」

昔はほとんど外食なんてしなかった。変わってしまったのだ、何もかも。

結奈は書斎から持ち出した箱を広げて見る。中からは明らか

に女性用だと分かる古ぼけた時計や髪留めなどが出てきた。
「やっぱりお母さんのだ」
奥から出て来たオレンジのカチューシャに見覚えがあった。それは神奈が結婚するまでつけ続けていた物で、結奈はそれを両親の昔の写真の中で見ていた。確か子供っぽいという理由で、結婚してからはつけていないと聞いていた。
「確かこれ、お父さんがあげたやつだったんだよね」
だから捨てられずにこの箱の中にとってあるのだろう。結奈は同時に白いシンプルな封筒が気になった。封筒には『神奈へ』と知来の字で書いてある。
「どうしよう……お兄ちゃん帰って来るまで待った方がいいよね？」
すると突然、携帯電話が鳴り始めた。ディスプレイには『治香さん』と出ていて、結奈は今日、お惣菜屋さんの手伝いを休む事を連絡していない事を思い出した。
「治香さんなら手紙の事、何か知ってるかも」
結奈は通話ボタンを押した。

舞子は電子メールの送信ボタンを押す。守屋家、雨宮家、御殿家、志摩の計七人への一斉送信だ。
次に志摩からの受信メールを開く。夏休みのバーベキューに関するメールだ。
舞子は親友を思い出す。いつも誰にでも優しく、なんでも頑張り屋さんな舞子の一番の親友。本来ならば、今頃幸せな生活を送っていたはずの彼女はもういない。
「早過ぎる……神奈」
舞子は高級デスクの真ん中に置かれた写真を撫でる。何度流したのか分からない涙が頬を流れた。
「駄目だな……歳を取ると涙脆くなる」
ハンカチを出して涙を拭った舞子の目には既に元の光が戻っていた。

今は泣いてる場合ではない。その親友の一番大切な人は、一番泣きたいはずなのに涙を決して流す事はなかった。

いくら知来でも流石にそろそろ限界だろう、と舞子は思う。それに本人は気付いてないが、来夏と結奈も相当無理をしている。知来が全てを見失っているせいで。

知来は誰かが助けを求めれば必ず走っていた。助けを求めなくても走ってくれた。舞子だって行事のたびに頼っていた気がする。

パソコンがメールの受信を伝える。守屋家なので、恐らく治香だろう。

治香からのメールを読んでノートパソコンを閉じた。

「今は私たちが……走る時だな」

「ただいまー」

何時もより早い時間に知来が帰宅するとリビングには結奈が一人でテレビを見ていた。知来にとってはとても懐かしい動物番組だ。

「おかえりなさい」

「来夏はまだなのか……いつもこの時間まで結奈は一人なんだな」

いつも遅くまで残業している知来は娘が一人で留守番しているのはやっぱり心配だ。冬だと五時で既に真っ暗になってしまう。

「あ、父さん、お願いがあるんだけど」

「珍しいな、何だ?」

「私、宮村高校の文化祭見に行きたいんだけど……一緒に行こう?」

「……来夏がいるじゃないか。あいつは在校生だぞ」

「私さ、高校受験、宮高受けたいんだよ。ねえねえ、駄目?」

うーん、と知来は頭を悩ませる。本人は子供の前で泣かないようにしているのを隠せているつもりなのだ。本当は意外と涙もろい知来は宮高に行っただけで泣いてしまうかもしれない。それだけ追い詰められているのだという事を、知来はまだ気付いていない。

「父さん、有給あまり使ってないでしょ?連れてって?」

と結奈は首を傾げる。目が合った瞬間、知来は結奈の中に神奈の

面影のようなものを感じて、顔を背けた。
「分かった。連れてく」
「やった！！約束だよ！？」
「ああ、土曜日とかなら仕事も休める」
知来は止まっている。周りが走り始めたのにはまだ気付いていなかった。

## Ｓｔｏｐ　ｏｒ　Ｒｕｎ（後書き）

【次回予告】前を向いて、またね
知来のために。宮村高校に青春時代を過ごした仲間が集結する。

# 前を向いて、またね

宮村高校の二年四組では、着々と文化祭に向けての準備が進められていた。来夏は慌ただしく動き回るクラスメイトを見ている。

そこに担任の沢野先生が様子を見にきて、ドアの近くに立つ来夏に話し掛けた。

「準備は順調？私は味見くらいしか手伝える事はないけれど」

「順調ですよ。ここ何年かはお惣菜屋さんなんてやるクラスもなかったみたいで、分からない事だらけですけどね。料理が一番大変みたいです」

「あら？来夏くん、知来くんに何も聞いてないの？」

「父さんに？いや、何も話していないです」

父は帰って来るのが遅くて、話す時間なんてほとんど取れていない。恐らく来夏の学校の事だけでなく、結奈の事も何も分かっていないだろう。

「英人くんと達平くんは？あの二人は何も言ってない？」

「さあ……」

英人と達平は来夏と沢野先生が話しているのが聞こえたのか、作業を中断して二人の方へ歩いて来た。

「何の話ー？」

「英人くんは両親に文化祭の事、何も話してない？達平くんも」

二人とも揃って首を横に振る。

「先生は何故、そんな事を聞いたんですか？何か親が関係あるんですか？」

「そうね、私がどうしてお惣菜屋さんをクラスに推薦したのか、三人は分からない？」

そう言いながら沢野先生は三人を促して廊下に出る。長くなるから、と言って廊下の端にある誰も使っていない教室に移動し始めた。

三人が教室適当に窓側の席に座ると先生は向かい合う形で廊下側

の席に座った。来夏が口を開く。
「長くなっても部屋を変えなくてよかったのに」
「私が泣いてしまうかもしれないのよ」
先生は外を見た。それは外の景色を見ているようであり、遠い過去を見ているようでもあった。
「この学校の文化祭は売り上げが点数になる。点数の多いクラスがもちろん勝ちね」
それは来夏たちも去年文化祭をやって知っていた。そして、黒字を出す事がどれだけ大変かも知っていた。
「二年生の歴代記録、一位はカジノをやったクラスよ。私が産休の時だけどね」
来夏の記憶では二年生だけでなく三年生の歴代記録もカジノだったはずだ。五年前の生徒会が賭け事は文化祭の趣旨に合わないとしてカジノを禁止としたが、実はカジノが儲かり過ぎて公平性を欠くからしい。所謂？殿堂入り？だ。
「私の知る限り、カジノはずっと一位だったはずよ。それでも私は二回、一位にならなかった年を知っている」
「えっ？そんな年もあったんですか？」
「ええ、初めてこの学校の文化祭でカジノが行われた時、私は二年四組の担任だったわ。その頃はまだ、ここが公立高校で、特進クラスも無くて四組は文系だったのだけど、その年の二年八組がカジノをやったのよ」
正直斬新だった。言わなかったが、沢野は最初、勝てると思っていなかった。
「そこで他のクラスが勝ったんだねっ？」
「そう。その時は八組が減点を受けたんだけど、減点無しでも勝っていた。それにその次の年も、私は産休に入ってしまったけれど、カジノは全体で三位だった」
「三位ですか……」
信じられなかった。来夏が見た最近十年間のデータでは、どの年

もカジノは圧勝していたし、酷い年なんて十万点の差がついている事さえあった。それを三位だなんて。

「何もカジノをやったクラスが下手だった訳ではない。その証拠に二年の歴代二位はその時の四組だし、その次の年は三年生の歴代四位と六位に入ってる」

「同じ年に二つも上位に……凄いですね」

それだけではない。殿堂入りしたカジノを抜いて考えると、恐らく一位二位だろう。

「どんな学年だったんだろう……」

「そうね、何をやるにも楽しそうなクラスだったわね。今でもよく覚えている、みんなリーダーの言う事をちゃんと聞いて、それでリーダーもみんなを頼って、それはまるでクラスと言うより一つの家族だったわ」

実際、本当に家族になった人たちも何人かいる。

話を続ける沢野の目には涙が浮かんでいた。

来夏は想像してみた。家族のようなクラス。それは恐らく、教室に来るだけでホッと出来て、友達と会うだけで悩みなんて吹き飛んで、一日一日が本当に短く感じるんだろう。それは文化祭だって何だって難なく乗り越える事だろう。

「その時にその子たちがやったのが、お惣菜屋さんだったのよ」

「お惣菜屋さん……」

お惣菜屋さんがカジノより大きな黒字を出す。そんな事、本当に出来るのか。

「そう、お惣菜屋さん。それでその時、中心になっていたグループがいた」

「グループ？」

「そう、男子五人に女子が途中から一人加わって四人。本当にみんな仲がよかった。打ち上げとか言ってお泊まり会やってるし、勉強会だってしょっちゅう。大人になって、子供が出来てもみんな仲良しのまま。もう分かっているわよね」

先生は三人を見渡す。三人も頷いた。
「そう、あなたたちの親よ。みんなでバーベキュー行った事、あったでしょ？」
「あります」
初めて行ったのは来夏がまだ五歳の時だった。言われなくても、来夏にはみんなが本当に仲良しなのが分かった。
「あの子たち見ててどう？」
「そうですね。羨ましいと言うよりも寧ろ凄いと思います。人を心から信じるなんて、家族の中でも難しいのに」
父からも母からも何度も聞いた。『父さんの友達でな……』、『母さんの友達でね……』。その話を聞くたびにどんどん両親の友達を想う気持ちが伝わってきた。それだけではない。幼い頃から共に過ごし、高校生の頃から恋人同士となった来夏の両親だって、お互いの事を本当によく理解していたし、大切にしていた。
でも……
「でも、最近バーベキュー行ってないんですよね。先生、知ってるでしょ？俺の母親の事」
「知ってるわよ、もちろん」
母、霜桐神奈の死。それは来夏の生活を大きく変えてしまった出来事だったが、一番大きく変わってしまったのは父の知来だ。
「あれからバーベキュー、行ってないんですよ」
するとそれまで黙っていた英人が口を開いた。
「あれー？来夏、何も聞いてないのー？」
「何を？」
「今年の夏、久しぶりにバーベキューやろうって舞子お姉さんが動いてるらしいよー。結奈ちゃんの所には話、行ってるはずだけどなー」
沢野先生は舞子お姉さんって、ぷぷぷっ！とか言っているが、それは無視した。それより来夏はバーベキューの話の方が気になる。
「それさ、うちの父さん来ないだろ」

「そうなの？　うちのかーさんは大丈夫！って言ってたけど」
「舞子ちゃんも大丈夫って言ってましたよ」
と、先生が口を挟む。
「結奈ちゃんが霜桐くんを文化祭に連れて来るんだそうです」
「ああ、それでお惣菜屋さんなんですね」
父は過去から目を逸らしている。苦しみから目を逸らしている。ただやみくもに前だけを見て無理をしている。そんな風に来夏の目には映っていた。
父の為に出来る事。父だけではない。三人がそれぞれの両親の為に出来る事。そして来夏は母の為に。
「お惣菜屋さん、やろうよっ！」
「僕、料理出来ないんだけどなー」
「俺、母さんのコロッケは誰も出来ないと思うな……」
それでもいい。父に思い出して欲しい。まだ、全てを無くした訳ではないって事を。
「先生、昔の事、俺に教えて下さい」
「僕と英人は親に聞いてみるねっ！」
「舞子ちゃんから、くれぐれも知来くんにバレないようにとの事です。それから三人とも……」
「俺たちが何ですか？」
「やっぱりあの子たちの子供ね、面影があるわ。三人を見ていると昔の事を思い出す」
三人は顔を見合わせた。それなら少しでも父さんや母さんに近付けるかもしれない。長い間、背中を追ってきた、ある意味憧れの存在に。
「文化祭はきっとあなた達の為にもなります。絶対に成功させてね」
「「「はい！！」」」
文化祭まで残された時間は少ないかもしれないが、来夏たちは知っていた。自分たちには心強い味方がいる。父さんや母さんがそうだったように、自分たちも仲間と力を合わせて目標に突き進めば、

絶対に成功させられる。
そして、文化祭当日を迎える事となる。

「ほら、父さん。そろそろ行こうよ」
「分かった、分かったから」
もしかしたらいけないかも、と言っていた知来も、いつもより早いペースで志摩が原稿を完成させた事により、無事に結奈と文化祭に行ける事になった。
学校までは歩いて数分。今だに残る自転車についての校則により、来夏もこの道を毎日歩いているはずだ。
「わー、本当に文化祭やってるねって当たり前か」
「この雰囲気、久しぶりだな……」
正門の所にはアーチが作られ、その脇には文化祭のパンフレットを配る係りの生徒がいる。さらにその奥にはクラスの出店の割り引き券のような物を配る生徒たちも見える。
パンフレットをもらい、二年生の教室がある階へ向かう。
「兄ちゃんが休みになる十一時くらいに来てって言ってたよ」
「何っ？今、まだ十時半じゃないか。あと三十分、どこかで時間を潰さないといけないのか」
まあ、文化祭だから時間はいくらでも潰せるだろう。知来は結奈のパンフレットを覗き込んだ。
「どこか行きたい所、あるか？」
「んー、そこの歌を歌ってる所は？丁度そろそろ始まるよ」
二年六組、大切な人に届けたい唄。パンフレットにはこのように書いてある。
「公演時間は三十分か、ぴったりだな」
「うん！！行こうよ！！」
結奈は知来の手を引いて六組に入って行き、空いていた後ろの方の席に並んで座る。
直ぐに時間になり、クラスの代表らしき生徒が挨拶をする。挨拶

が終わるとグランドピアノの前に座っていた女子生徒の指先が動き、美しい旋律を奏で始めた。
　流れるような前奏にソプラノの声が重なり、アルトの声が重なり、テナーの声が重なり、一つの歌になっていく。
　一つ目の歌が終わる頃には、聴いていた観客は既に歌の世界に飲み込まれていた。
「凄い……上手いな……」
「うん、これが高校生の歌なんだね……」
　知来と結奈が歌に聴き入っている間に時間は過ぎ、二年六組の公演も残すところあと一曲となる。他の曲と同じように、ピアノが奏でるハーモニーに声が、心が重なって、一つのメッセージを生み出していく。大切な人に届けたい唄。
ーー目を閉じればいつもあなたはそこにいる
　知来は目を閉じた。まぶたの裏にはいつも隣に居てくれた、大切な人がいる。
ーー耳を澄ませばいつもあなたの声が聴こえる
　懐かしい声が聞こえる。知来には確かに、大切な人が自分を呼ぶ声が聞こえた。
ーー私の中のあなたは消えない、あなたの中の私も消えない
　消える訳がなかった。あの日から、いや、それよりもずっと前から、その人を想わなかった日はなかった。毎日毎日、好きという気持ちが大きくなっていった。
ーー私はここにいる
　あの人が手を伸ばしてくる。
ーーほら、一人じゃないよ
　あの人の手が近付いて来る。
ーーほら、右手出して
　言われるままに、知来は右手を出した。温かい感触が知来の右手を包み込む。
ーーいつまでも繋いでいて

「……神奈」
「父さん？」
知来は目を開ける。まぶたの裏の幻想は消え去り、目の前には心配そうに自分を見つめる結奈と、結奈の胸に包まれた自分の右手をあった。
「父さん、大丈夫？」
「ああ、大丈夫……な、はず」
神奈はもういない。分かっているはずなのに、それでも神奈が寄り添っているように感じてしまう。
「もう……神奈は居ないんだよな」
「父さん……」
「届けたい唄、まだ伝えたかった事、たくさんあったはずなのに。もう届かないんだよな」
目から涙が零れそうになるが、結奈の前で泣くわけにはいかない。自分は強い父親で居なければいけない。知来は必死で涙を堪えた。
「父さん、兄ちゃんのクラス、行こう」
「そうだな」
公演が終わり、他の観客に混じって教室を出る。料金は自由と書いてあったので知来は五百円玉を二枚入れた。
「四組か……」
一年間通い続けた教室、いろいろな思い出が詰まった教室、それが、わずか十メートル程先にある。二度と来ないと思っていた。廊下に飛び出した２－４のプレートは昔と何も変わっていない。
二十年程前の文化祭、知来はこんな風景を見たような気がしていた。文化祭で浮かれた様子の生徒が廊下を駆け、教室の中からはお客を呼ぶ声が響く。あの時は確か、横に志摩が居たんだった。
五組の教室を通り過ぎ、四組の出入り口に掛けられている？清里弁当、宮高店？の看板をくぐった。
そこにはクラスの仲間が居て……
「「「おかえり！！」」」

「ただい……ま？　あれれ？」
「どうしたのよ？」
そこには昔と変わらないクラスの仲間が居た。
「あれ？……は？」
頭の中で考えがまとまらない。そう言えば、看板も？清里弁当、宮高店？になっていたような気がする。
「あの時と……同じ？」
二年四組の何もかもが昔のままだった。コンクリートの上に木を貼って作られた床や、木も貼ってないコンクリートむき出しの壁とそのヒビの模様も、お惣菜屋さんの風景も、そして何よりあの頃青春を共に過ごした仲間も。
「おかえりー、知来くん」
「ただいま、になるのかな？」
「サプライズ成功かしら？みんな忙しいけど知来の為に集まったのよ」
そう、何もかもあの頃と同じ。志摩がいて、舞子がいて、治香と守屋がいて、雨宮と花音がいて、治良がいて、知来もいる。でも……決定的に違う事が一つだけあった。
神奈だけが、ここにいない。
その事を声に出したら泣いてしまいそうだった。
二度と埋まる事のないピースがある。知来の最愛の幼馴染はもういない。
だから、あの頃の仲間がもう一度揃う事は出来ない。
知来の目からは堪えていた涙が溢れ出した。
「知来……」
志摩の声が聞こえる。
朦朧とする意識の中で、知来は呟いた。
「こんな世界、もう嫌だよ……」
知来の身体が横に倒れる。
会いたい。今すぐ、神奈に会いたい。

みんなの声が聞こえた気がした。
それでも知来は、自分が教室の床を通り抜けて、深い深い暗闇に落ちていくように感じていた。

一面何もない世界。
ただ、真っ白な地面が永遠に広がっている。
ここはどこだろう。
「ともくん」
不意に声を掛けられて振り向くと……
そこには神奈がいた。
「神奈？」
「久しぶりだね、ともくん。こんなに会わなかったのは今まで始めてかな」
幼稚園の頃から一緒にいて、そして大人になってから、ずっと一緒にいる事を誓い合った。でも、その約束は十数年分しか果たされる事はなかった。俺は腹の底から悲しみが溢れて来るのを感じる。
「どうしたの？そんな顔して」
「いや、何でもない。それよりここはどこなんだ？　俺まで死んじゃったのか？」
すると神奈はふふっと笑った。来夏と同じふわふわウェーブでダークブラウンの髪の毛が揺れる。
「ここはともくんの夢の中のはずだよ」
「夢？」
「さっきここに来る時にすれ違った人から、霜桐家の人間は特殊な夢を見る能力があるって聞いたよ。これもともくんが見てる夢なんだって」
「特殊な能力……なるほど、俺が死んじゃったから神奈と会ってる訳ではないのか」
「大丈夫、まだまだやる事がいっぱいあるともくんは死んだりしないよ」

ま、私はやる事あったはずなのに死んじゃったけど、と神奈は言って目を伏せた。
「そんな事より、ともくんはどうしてここに来たの？」
「そんなの俺にも分からないよ。大体、お前は本当に神奈か？　俺が見てる幻想じゃないのか？」
「それ、私が『本物だよ』って言ったとして、どうやって確かめるの？」
「確かに……自分で判断するしか無いって事だな」
俺の思い込みでどちらかに自由に決める事も出来るという事だが。
俺はとりあえず、神奈がくれたヒントから考える事にした。
「ここに来た理由を聞いたって事は、ここに来るには理由が必要だって事か」
それは例えば、未来地図の時に未来が見たいと思うように、何かを祈らないといけないのかもしれない。
それなら会えるはずのない神奈に会う理由は、俺が会いたいと願ったからだろうか。倒れる直前の想いが、この夢を見させているのかもしれない。
「ねえ、ともくん」
不意に神奈が話し始めた。
「ともくんは私が生きていた時に戻れるとしたら、戻りたい？」
「戻りたいさ、戻れるなら」
もう一度、あの頃の暖かい家庭を取り戻したい。もうこんなどこまで行っても真っ暗な世界は嫌だ。
「でもね、戻れないんだよ。人は過去を思い出として振り返る事しか出来ない。人生は戻れないから楽しいんだって、二年生最後の日に言ったのはともくんだよね」
「ああ、覚える」
「そしてこうも言ってたよ、今できる事は未来に後悔を残さない事しかない。ともくんは実行出来てる？」
言われてみると全く出来ていなかった。過去の出来事に囚われて、

今を生きることから逃げていた。
「その時、ともくんはもう一つ言ってた事があったけど……これも覚えてる？」
「えーと……」
クラスのみんなに一年間のお礼を言った。でもこれは関係無いだろう。俺があの時口にして、今のこの場面に関係ある事は……
「解決策を探せばいい？」
「そう、それだよ。ともくんが言った事なのに、忘れたの？」
神奈は首を傾ける。ふっと風が吹き、神奈の髪の毛が風に流されて美しい、常に俺の横にあったその顔にかかる。
「それならさ、私がいなくても、出来る事があるんじゃないかな。もちろん私は寂しいけど、ともくんが辛そうにしてるのはもっと寂しいよ。それに私だって、あの世界に残してきたものがある。ともくんはそれを知ってるはずだよ」
暖かい家庭に戻りたいと思った。でも、人は過去に戻れない。それなら、もう一度暖かい家庭を作ればいい。それはきっと来夏や結奈も望んでいる事だし、家庭を冷たくしているのはまさに自分だった。俺はさっきから真っ白の地面しか見れなくなっていた。自分に対する怒りから、足の指先に力が入るのを自覚する。
「俺は本当に何回失敗すれば気が済むんだよ……」
「大丈夫、取り戻せる失敗なんて失敗の内に入らないよ。ほら、前を向いて」
「前？」
俺が顔を上げると神奈は泣いていた。本当は前がどっちかなんて分かっている。それでも俺は、まだ前を向けなかった。
「前はこっちじゃないよ。私のいる方は後ろ。ともくんはたまーにこっちを思い出して、見てくれるだけでいいから」
「神奈……」
「ほら、向こうを向いて」
「無理……無理だよ」

「無理じゃないの。ともくんは向こうを向かないといけないんだよ。それともここで、始めての夫婦喧嘩でもしたいの？」
「そんな……だってそんな事したら……」
「私は大丈夫だから、早く前を向いて」
「……うぅ……神奈……ごめんな」
「何でともくんが謝るの？ほらいいから、向こうを向いてよ」
「何から何まで心配かけて、本当にごめんな」
俺は神奈を強く抱きしめてから背中を向けた。俺の目からも自然と涙が零れ落ちた。
「じゃあ一歩、踏み出して。ともくんがいるべき世界はここじゃないから」
「分かってる」
「ともくんが前を向いてくれれば、私が背中を押してあげれるから」
神奈は俺の背中に両手を当てた。伝わってくる温かさから、今見ている景色が決して幻想なんかではないと分かる。
「これで戻れるのか？」
「多分、ともくんがここに来た理由は未来に目を向けられるようになるためだから、戻れるよ」
未来に目を向ける。未来に夢を抱いて、一歩ずつ進む。一寸先は闇とも言うけど、一寸先にある未来の色はきっと自分で決めれるはず。
「ねえ、ともくん、覚えておいて欲しい事があるから言うね。分かってるかもしれないけど私が残してきたものが二つあって、絶対にともくんの力になれる。そうしたら私も一緒に居られるはず」
「分かった。それじゃあ俺、もう行くよ。何か他に伝える事はないか？」
「うん、今伝えたい事はちーちゃんに託してあるから大丈夫。またね」
神奈が背中を押す。俺も右足を前に出した。
神奈が押している背中は、温かさが最後の最後まで残っていた。

目が覚めると、知来は学校の保健室で寝ていた。周りには知来の仲間であり、そして神奈の仲間でもある七人と、二人の子供である来夏と結奈がいた。

神奈が残してくれたもの。

友達と家族。

友情と愛。

そのありがたさを、知来は痛いほどよく感じていた。

「知来、大丈夫なんか？急に気失ったりして、びっくりしたんやけど？」

「大丈夫、みんな心配かけてごめんな」

「何か吹っ切れたような表情をしているみたいね」

「ああ、夢の中で神奈に会ってきた」

神奈と再開して、知来は何か変わったのだろうか。いや、変わらないといけない。これから、もっと。

知来はもう一度周りを見た。自分が高校生だった時と変わらない仲間がいて、神奈はいないけどその穴は来夏と結奈が埋めてくれる。

神奈はもういないんだ。

悲しいけれど、その現実を受け止めて、前に進まなければいけない。それが神奈の願いだ。

「みんな、ありがとう。こんな俺のために文化祭に集まってくれて」

「何を言ってるんや、俺たち仲間やろ」

「私も昔、言ったはずだ。どんなに距離が離れても私たちはいつも一緒だ、絶対に一人じゃないし、誰も一人にしない。一人で苦しんでいる霜桐をほっとける訳が無いだろう」

「そうだよ、ともくん。神奈ちゃんがいなくなって、悲しいのはともくんだけじゃない。私だって、治香ちゃんだって、舞子ちゃんだってお葬式では泣いてた。すっごく悲しかった。それでもともくんは決して泣かなかった」

無理してたんだ。昔は一人で抱え込んだりしなかったのに。文化

祭の時みたいに仲間を頼って良かったのに。
　子供たちの前で、強い父親でいるために無理をした。決して涙を見せてはいけないと思っていた。
「来夏と結奈もごめんな。父さん、いろいろ間違ってた」
「そんな事ないよ。父さんが私たちのためにしてくれた事は間違いなんかじゃない。本当は私、もっと辛かったけど、父さんが背負ってくれた」
「俺たちは大丈夫だから、三人で背負っていける」
「そうだな」
　知来はベッドから立ち上がる。時計を見ると、自分が約二十分も寝ていた事が分かった。
「元気そうですね。それでこそ、霜桐さんですよ」
「夢の中で、神奈と約束して来たから。後ろを向くのはたまーにでいいって言ってた。前を向いて歩くように約束した。背中を押してくれた」
「それじゃあ霜桐、文化祭の代休日にうちの旅館で久しぶりにバーベキューをする事になったんだが、来れるな？」
「まさか知来は断わらんよな、前みたいに『結奈が……』とか言って」
「えっ？私ですか？私は全然問題ないよ、父さん」
「分かってる」
　分かってる。本当は自分が問題だったのに、休みたい理由を結奈にしていただけだ。
「よし二人とも、バーベキュー行くぞ。時間は何時だ」
「何時もの所に午後三時集合だよー。何だか子供たちは午前中、学校で片付けがあるらしいねー」
「午後三時だな、分かった」
　神奈の事を忘れた訳ではない。
　仲間の事を思い出しただけだ。
　まだこんなに素晴らしい仲間がいる。

だから、もう神奈の事を悲しむのはやめよう。神奈だって望んでない。それどころか、応援してくれていた。
知来は決意を新たにし、やっと前に進み始めた。

## 前を向いて、またね（後書き）

【次回予告】届け！！

本当の最終回。繋がってるから、届けられる想い。

# 届け！！

宮村から少し離れた山奥のバーベキュー場では、舞子によって、今日の営業は中止にされている。
午後三時を過ぎて、やっと元クラスメイトの八人とその家族が揃った。
「霜桐家が最後だったな」
「悪い、何だか文化祭の片付けが終わらなかったらしくてな」
「気にするな、今日も貸し切りだ。それに時間も食材もたっぷりあるぞ」
そこに志摩と治良が食材を運んで来て、治香たちが下ごしらえを始める。
「あれ？治香、俺たちは何をすればいいんだ？」
「料理出来ない人はやる事ないわね。邪魔にならないようにしてて」
あれ？もしかして俺邪魔かも？と思った知来は仲間を探す。
「おい、雨宮。お前料理は？」
「カレーくらいなら」
「クソ！！志摩は？」
「俺、一人暮らしやで。悲しい事に一通り出来てしまうんや……」
「何っ！？治良は？」
「雨宮さんと同じくカレーなら。料理はいつも妻に任せっきりです」
「ええっ！！あ、守屋んは出来ないよな？」
「失礼なー、フィッシュアンドチップスくらいなら作れるよー」
「良かった、役立たずは俺だけじゃない。今日は二人で仲良くやろうぜ！！」
「だからフィッシュアンドチップス作れるって言ってるでしょー！！」
「えっ？あれは料理としてカウントするの？」
「今、君はイングランドの人全てを敵に回したよー？」

何はともあれ、今この場において、フィッシュアンドチップスが役に立つ事はない。知来は志摩と守屋を連れて川に行く事にした。
「霜桐、神奈ちゃんが料理出来るからって休みの日とかに全く手伝いをしなかっただろ」
「雨宮……まさか俺の心を……」
「読んでねえよ。今は家族サービスって言ってな、父親も家族のために尽くす時代なんだよ。大体、霜桐家は共働きだっただろ？」
「返す言葉も御座いません」
「まあ、人手が必要になったら呼ぶから霜桐たちは川に行っていいぞ。子供たちもいるだろうし」
「じゃあ任せたよー。ほい！！役立たず三人組は川に行こー」
「だから俺、料理出来るって言ってるやろ……何で役立たずなんや……」
そんなつぶやきを残す志摩は無視して、知来たち三人は川に向かった。

知来たちが川から戻ってくると、バーベキューの準備はほぼ終わっていた。治香を中心に雛さんと花音、それにどうやら結奈も、守屋家の娘の詩乃と一緒に手伝いをしていたようだ。
「ところであんたたち、いい歳してなにびしょ濡れになってんのよ」
「いや、ちょっと泳げないとかバカにされて……」
「まだ水が怖いの！？」
しばらくプールには行ってないが、むしろ神奈がいなくて浮き輪とかかなり心配。
「肉焼くぞ、手伝え」
「あれ？舞子も料理してたのか？」
「ししししてたに決まってるだろ！！おかしな事を聞くな、全くこれだから霜桐は、私が料理出来ないと思って」
「お前、焦り過ぎだ。料理してなかっただろ」
「それだから結婚出来ないんや」

「「お前が言うな」」
「こら！！漫才はいいから早く肉を焼きなさい」
怒られた知来たちは肉を焼く準備をする。肉の他にもタマネギ、ピーマン、椎茸などなど野菜も豊富だ。どんな時も頼りになる雨宮が肉を焼いていく。
「こっちに普通の料理もあるから、バイキングみたいに食べてねっ！」
「知来！！ぼさっとしてないで、飲み物くらい準備しなさい！！」
知来と志摩がお茶（車で来てるからビールは飲めない）を配ると肉も焼け始めた。
「そろそろ食べようよっ！」
「「「いただきまーす！！」」」
みんなで他愛ない話で盛り上がる。高校二年の時にみんなと出会って、何度こうして会話を重ねてきたのだろうか、想像出来ないくらいのくだらない会話があって、その上は友情の橋でがっちり繋がっている。メンテナンスなんて全く必要なかった。
一緒にいる。
ただそれだけで、こんなにも温かい気持ちになれる仲間と出会えた。
偶然だったのかもしれないし、必然だったのかもしれない。それでも知来は、本当に自分の幸運を感じていた。
このメンバーは死ぬまで一緒。もちろん神奈も含めて。
知来はこぼれそうになる涙を押し込めた。こんなので泣いていたら、また泣き虫とか言われてしまう。
「父さん」
「お？何だ？」
呼ばれて振り向くと来夏と結奈が立っていた。
「バイキングのコロッケ、父さんに食べて欲しいの」
「え？食べるけど何で？」
「父さん、結奈が学校を休んで、昼間何をしてるか知らない？」

「家の掃除をしてくれてるんじゃないかと思ってた」
「それだけじゃないよ。結奈はお惣菜屋さんで料理の練習をしていたんだ」
「マジか……」
本当に知らなかった。ずっと家にいると思ってた。子供たちの事、本当に何も分かっていなかったんだ。
これでは父親として失格かもしれない。今は。
「ごめん、二人とも。俺、何も知らなかったよ。でもさ、これからもっと二人の事、理解出来るようになるから。三人で温かい家庭を作れるように頑張るから」
「うん！！私も手伝える事は手伝うよ」
自分が死んで、天国に行った時に、神奈と胸を張って会えるように。自分たちの子供はこんなにも凄い奴らになったんだよって言えるように。今は、神奈と夢の中で結んだ約束を果たす事だけを考えよう。
「それにしても、どうしてお惣菜屋さんに？」
「だからこれを食べてよ」
そう言って差し出されたコロッケを知来は食べる。その瞬間、口の中にコロッケの風味が広がった。味付けは特別に何かしてあるわけではなく薄い塩味で、じゃがいもの味が活かされ、中身はギッシリと詰まっていながら健康にも気を使ったヘルシーなコロッケ。その味に知来は覚えがある。なぜなら……
「……神奈のコロッケの味だ」
何度も食べたこの味。料理が本当に美味しかった神奈の、一番の得意料理。その味が見事に再現されていた。
「美味しい。本当に美味しいぞ、結奈」
「父さん、私ね、将来の夢が決まったんだ」
「あ、俺も進路決めた」
「へー、夢を持つ事はいい事だ。ちなみに何だ？」
「母さんみたいに料理を練習して、清里のお惣菜屋さんで働いて、

美味しいご飯をたくさんの人に食べてもらいたい」
「俺は医学部に行く。家族を失って悲しむのは辛い事だから、少しでも悲しむ人を減らすために医師になる」
二人の夢は、本当に胸を張れる素晴らしい夢だ。そして、その夢を与えたのは神奈である。神奈の意思は今も、そしてこれからも、二人の中で生き続けている。
「だけど結奈、学校は行った方がいいと思うぞ？」
「うん、明日から行くよ。もう大丈夫みたい」
知来はそんな結奈を見て安心するが、結奈が大丈夫と言っているのは知来の事だという事は知らない。
「ほら、霜桐家もこっちに来なさい」
治香に呼ばれて、三人はみんなの輪の中に入っていく。

食材はほとんど食べ尽くされ、全員で片付けを行う。少しでも役に立てて良かった……
「あれ？この後どうするんだ？また俺の家か？」
「いや、まだやる事がある」
と、舞子に言われて、屋根付きベンチで座って待っていると、それぞれ片付けを終えたメンバーから集まってきた。
四人掛けベンチの思い思いの場所に全員が座る。
「それでやる事って何だ？」
「そう焦るな、今から読んでやるから」
そう言って舞子は何やら紙を取り出した。
「何だその紙？」
「知ってるはずだぞ。私はこれを神奈に二十年程前に預かった。いらないと思ってたから捨てようとしたが、とって置いて正解だったようだな」
舞子は読むぞ、と言って読み始めた。
「結婚二十周年、おめでとうございます。
あなたがこれを目にしているという事は、私はいないのですね。

私がいたら自分で伝えるつもりですから」
「これ、まさか……二十年後のお互いに宛てた手紙？」
「へー、そんなん書いたんや」
知来が神奈に宛てて書いた手紙も書斎の箱の中にしまってある。もう、読むことはないだろうと思っていた手紙だ。
「私は幼稚園で初めてあなたに出逢いました。
たまたま家が隣で仲良くなって、それから何年も何年も一緒にいる内に、私は気付いたらこう思っていました。「私はこの人と一緒にいれば幸せだ」と。それが小学生だった私の初恋です。中学、高校と時が変わっても、私のその想いが変わる事はありませんでした。いつかあなたに振り向いて欲しい、そう想いながら毎日過ごしていました」
中学時代、高校時代、神奈と過ごした時間が頭に浮かぶ。失恋を慰めてくれたし、一緒に勉強もしたし、弁当も作ってもらったし、特に高校生活は青春の全てだった。
「そこからは話した事があると思います。私は親友のおかげで変わることが出来て、十年越しの想いを伝えました。あの頃を思い出すと、今こうしてあなたと夫婦になれたのが信じられません。どこか夢じゃないかと思っている自分がいるのも確かです」
屋根付きベンチには治香の声だけが響く。全員が手紙の内容に聴き入っていた。
「あなたは結婚式で、幸せな家庭を作る、と誓ってくれました。私は正直、あなたと一緒にいられるだけでずっとずっと幸せでした。私は既に幸せでいっぱいです。だから、どうかその分は子供たちに分けてあげて下さい」
将来の夢の欄に？理想の母親？と書いていた神奈の意思は二人の子供の中で新たな夢を芽生えさせた。二人の夢はいつか、大きな花を咲かせるだろう。
「ずっと一緒にいると約束したのに、守れなくてごめんなさい。もし大変な思いをしていたらごめんなさい」

「……そんな……何で謝るんだよ……神奈は悪いことなんてしてないのに」

舞子の声に涙が交じり始める。

「あなたには本当に迷惑をかけてしまったかもしれません。それでも、私は伝えたい。

私と一緒にいてくれてありがとう。

私はあなたから本当にたくさんの幸せをもらいました。少しでも返せたでしょうか？」

幸せの量なんて分からない。それでも知来は十分幸せだ。それだけで十分だった。

「私はいつも何でも自分で解決しようとしてしまうあなたが心配です。本当だったら私が隣にいられたのに。私が隣にいないといけないのに。本当にごめんなさい」

「だから謝るなって……」

舞子の頬を涙が伝う。それでも手紙を読む事を止めない。

「私はあなたが大好きです。言葉で言い表せないほど愛しています。そんな私の最後の願いを聞いて下さい。

ともくん、

幸せな人生を送って下さい。

悔いがない人生を送って下さい。

ともくんらしい、ともくんだけの人生を送って下さい。

それが私の願いです。

一足先に天国で待っています。

いつまでも待っていますから、ゆっくりゆっくり来て下さい。

その時にあなたの話、聞かせて下さいね。

霜桐神奈より」

舞子が泣き崩れ、花音が震える肩を支える。知来の視界もぼやけ、頬に温かさを感じた。

「ちーちゃん、お疲れ様」

「舞子、本当にありがとうな」

手紙を大事にとって置いてくれて、手紙を最後まで読んでくれて。
「あんた、いい奥さんもらったわね」
「ああ、本当にな」
お金で買えないものがある。それは友情であり、愛情であり、運命である。神奈はそれら全てを与えてくれた。神奈といたから友達の輪が広がり、恋愛をし、家族になれた。
「さて、そろそろクライマックスだ」
ハンカチで涙を拭いていた舞子が立ち上がる。
「私から、みんなに提案がある。みんなは神奈にまだ伝えきれてなかった事、伝えたい事があるだろう。それを伝えよう」
「どうやって？」
「打ち上げ花火」
「え？ここで？」
「もちろん、消防の許可も得た。知来はこの紙に手紙を書け。花火に入れて一緒に飛ばしてやる」
花火って一発何十万円もするのに……まあ、この好意はいただいておく事としよう。
「知来が手紙を書き終わったら山に登って頂上から見るぞ。男たちは今のうちに荷物を車の中に積んでおけ」
「了解ですー」

山を登り頂上に着くと、そこは少し開けた場所になっていて、宮村市の市街地全体が見下ろせるようになっていた。
「俺、ここに来るの始めてだ」
「ふーん、所で知来、手紙に何て書いたんや？」
「言う訳ないだろ。お前が死んだら神奈に聞け」
と言っても、大して大きな紙ではなかったので、感謝の気持ちとその他もろもろしか書けなかったが。
「全員準備はいいか？」
「いいよっ！早く早くっ！」

舞子が携帯電話で指示を出す。
「後十秒だそうだ」
「結構急だな」
心の中で数を数える。三、二、一……
ピュルルルー、と火の玉が夜空に上がる。
「かんちゃーーーん！！！見てるーーー！？」
花音が叫ぶ。
「昼ごはん毎日ありがとうございましたーーー！！！」
雨宮と守屋が叫ぶ。
「また会いましょーーう」
治良と雛さんが叫ぶ。
「お惣菜屋さんは任せなさいねーーー！！！」
治香が叫ぶ。
「知来の事も任せとけーーー！！！」
志摩が叫ぶ。
「お前はずっと私の親友だーーー！！！」
舞子が叫ぶ。
「俺、母さんの子供で良かったーーー！！！」
来夏が叫ぶ。
「コロッケ出来たよーーー！！！」
結奈が叫ぶ。
「俺、頑張るから見てろよーーー！！！」
知来が叫ぶ。
少し薄暗くなった空に満開の花が咲き、一瞬遅れて音が届いた。
一瞬だけ咲き誇った満開の花、神奈にも見えただろうか。知来たちの言葉は神奈に伝わっただろうか。
伝わったに決まっている。いつだって見えない糸で繋がっているんだから。
知来にはもっともっと言いたい事があった。でも、いつかきっと会えるから。ここじゃないどこかで会える。またみんなで笑える日

が来る。その日を信じて、前を向いて歩く事が知来の役目。
「花火、近かったね」
「こんなに近くで見たのは始めてだ」
来夏と結奈。二人の中に神奈が蒔いた夢の種に水をあげて、花火のような大きな花を咲かせる事が知来の役目。
「花火、近かったな。でもな、来夏、結奈」
知来は二人の肩を両手で抱き寄せる。
「俺たち家族はもっと近くにいる。もちろん神奈も」
「うん」
家族は温かい。
そこに居なくたって欠けてる訳じゃない。
俺たちはいつまでも家族だ。
「そろそろ帰るか、暗くなると山道が危ない。寒くはないか？」
「寒いわけないだろ。心がポカポカだぜ」
知来たちは山を降り始めた。
帰り際、知来が最後に後ろを振り向くと、流れ星が光って消えた。
「見てるよ」
そう聴こえた気がした。

人は一人では生きていけない
人間はそんなに強くない
助け合って生きていくしかない
それが分かっていても出来ない人もいる
だったら
手を差し伸べてあげればいい

これはそんな
人と人の繋がりを描いたストーリー

## 届け！！（後書き）

【ウソ予告】老年期
定年、孫の誕生、様々な事を経験しながら時間を過ごした知来たちも、そろそろ記憶が曖昧に。青春時代を共に過ごした仲間との絆は認知症に勝てるのか！？
１１／８の活動報告をご覧ください！！

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4225bv/

未来色ドリーマー　～未来編～

2013年11月9日13時00分発行